

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.37

～特集 戦後70年展～



八王子市郷土資料館の戦時中の暮らしの再現

2016.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目次

【特集】戦後70年展	2
●終戦70年企画展「東村山地域をめぐる銃後と前線」を終えて	
東村山ふるさと歴史館 高野宏峰	2
●「三橋國民 鎮魂70年目の夏」展	
町田市立博物館 矢島律子	2
●戦後70年、ふたつの平和祈念事業—戦争体験を次の世代に伝えるために—	
調布市郷土博物館 金井安子	6
●「平和のための戦争資料展」開催について	
福生市郷土資料室 針谷もえぎ	8
●「戦後70年 日野市郷土資料館の取り組み」	
日野市郷土資料館 秦 哲子	10
●山田櫻考案 野口啓助試作 模型防毒面	
小金井市文化財センター 多田 哲	12
●企画展示「戦後70年～私たちのまちは戦場だった～」の開催	
東大和市立郷土博物館 浜田恵美	16
●特別展戦後70年 昭和の戦争と八王子	
八王子市郷土資料館 美甘由紀子	18
●紙芝居で「八王子空襲」を語りつぐ	
八王子市郷土資料館 ガイドボランティア紙芝居会 池田ヨネ	22
会員館活動報告(順不同)	24
府中市郷土の森博物館、町田市立博物館、青梅市郷土博物館、調布市郷土博物館、奥多摩水と緑のふれあい館、瑞穂町郷土資料館 けやき館、福生市郷土資料室、武蔵村山市立歴史民俗資料館、あきる野市五日市郷土館、羽村市郷土博物館、清瀬市郷土博物館、立川市歴史民俗資料館、檜原村郷土資料館、日野市郷土資料館、くにたち郷土文化館、東村山ふるさと歴史館、東大和市立郷土博物館、パルテノン多摩歴史ミュージアム、江戸東京たてももの園、たましん歴史・美術館、東京都埋蔵文化財センター、集合住宅歴史館、多摩六都科学館、国立ハンセン病資料館、コニカミノルタサイエンスドーム(八王子市こども科学館)、八王子市郷土資料館、国立天文台天文機器資料館、首都大学東京91年館、狛江市立古民家園(むいから民家園)	
東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿	41

終戦70年企画展「東村山地域をめぐる銃後と前線」を終えて

東村山ふるさと歴史館 高野宏峰



出征兵士に送られた留守家族勤労奉仕の写真(昭和13年)
東村山軍友会が、出征兵士に対し、留守家族の状況を写真に撮り戦地に送ったもの。青年団や近所の人の勤労奉仕している様子がわかり、「銃後」東村山の状況を見てとることができる。



梅岩寺付近に投下された不発弾処理の写真(昭和49年)
梅岩寺は疎開児童が寄宿していたが、そこにも爆弾が投下された。戦後約30年を経て処理された不発弾は、銃後が次第に前線へと変貌していった様子を示し、その爪跡を今に伝えるものである。

■はじめに

平成27年(2015)は第二次世界大戦が終結した昭和20年(1945)から70年の節目にあたり、全国各地で戦争に関する展示が開催され、メディアからも戦争中のできごとが広く紹介された。当館もこうした動きに合わせて終戦70年企画展を開催した。

戦時中の東村山には、陸軍少年通信兵学校(東京陸軍少年通信兵学校)があり、その跡地は市指定旧跡になっている。また、国の末端機関として市町村役場が担った徴兵・動員業務に関わる「兵事関係書類」が、東村山では焼却されずに残されており、全国でも数少ない貴重な資料となっている。

今回、特集「戦後70年展」に執筆する機会をいただいた。戦争の「記憶」を「記録」として、いかに次代へつないでいくかが博物館に求められた役割であると考え。展示の紹介を通じ、そうした課題の参考になることを期待したい。

■企画展の概要

今回の展示では「銃後」と「前線」という対立する言葉で、東村山の戦争を概観することを試みた。昭和13年の国家総動員法のもと、東村山地域は近郊農村であることから、都市への食糧供給などを行なう「銃後」で、昭和19年の学童疎開促進要綱などにもとづき疎開を受入れる地域のはずであった。一方で、昭和12年に勃発した日中全面戦争が泥沼化し、昭和16年に勃発した太平洋戦争でアメリカ・イギリスなどとも戦端が開かれると、そのころから東村山周辺地域には軍事関係施設が広がるようになった。さらに、戦争末期の昭和20年に硫黄島や沖縄を失うなど戦局が悪化すると、東村山地域にも軍隊が駐屯して本土決戦に備え、空襲によって多くの住民が亡くなり、米軍のB29爆撃機も墜落して搭乗員が戦死するという、東村山地域が「前線」となっていく様子を反映していた。

ところで、当館では戦争関連企画展を平成19年、20年、24年に実施したが、「あの日々の記憶—東村山の空襲と疎開—」

「陸軍少年通信兵学校」では個別テーマの色合いが強く、「町の記録が語る戦時中の東村山—隠された徴兵の記録—」では日記や公文書の展示が中心であったため、館収蔵のモノ資料から戦時中の東村山全般を語るという面が弱かった。本展示ではその反省をもとに、過去の展示で使用しなかった収蔵資料を主に展示することを心がけ、以下のとおり展示コーナーを3つに分け、その中に小コーナーをいくつか設けた。各コーナーに「資料紹介」とあるのは、コーナーで特徴的な資料群をトピックスとして紹介し、モノから判る戦時中のできごとを示すものである。

I 銃後としての東村山

資料紹介 統制陶磁器

1 銃後の生活

2 疎開の受入れ

II 東村山出身の兵士

資料紹介 出征・除隊等の記念杯

1 出征と帰還

2 兵事関係書類

III 前線となった東村山

資料紹介 警防関係書類綴

1 東村山の空襲

2 東村山地域の軍関係施設

3 歩兵第503聯隊の化成国民学校駐屯

「戦時中」について、本展示では昭和8年～昭和20年、すなわち、満洲事変から太平洋戦争終結までの時期を扱った。戦時中の東村山は、特徴的な事例を複数有しているが、今回の展示で新たに紹介した事例について以下に述べる。

■「銃後」としての東村山—さまざまな疎開受入れ

都市部などでの空襲の危険に対応するため、多摩地域はさまざまな疎開を受入れていた。東村山地域は近郊農村であり、多くの疎開者を受入れることができる余地があったのである。その概要を示すと以下ようになる。

- 学童集団疎開受入れ … 東京女子高等師範学校附属国民学校（同校久米川疎開学園）、赤坂国民学校（化成国民学校、梅岩寺、正福寺）
- 島嶼疎開受入れ … 八丈島島民
- 一般疎開受入れ … 2500人
- 疎開図書受入れ … 都立牛込図書館蔵書1400冊
→ 東村山町立図書館開館

本展示ではじめて紹介した事例が、疎開図書の受入れである。公文書からは「三多摩地区図書館設置依頼」を紹介し、さらにふるさと歴史館の蔵書から疎開してきた書籍を展示した。昭和15年に購入された書籍には「市立牛込図書館」と「東村山町立図書館」という二つの図書館印があり、図書疎開を裏付ける「生き証人」となっている。

「銃後」としての疎開受入れという構図であったが、昭和19年末より多摩地域への空襲が激しくなると、こうした状況の中、東京女子高等師範学校児童は富山県への再疎開を実施したが、赤坂国民学校は再疎開検討中に終戦を迎えた。

■「前線」となった東村山—軍事施設の拡大と軍隊の駐屯

昭和初年から、北多摩地域に軍事関連施設や軍需工場が進出し、東村山地域にも昭和15年頃より軍事関連施設などが移転してくるようになる。戦争末期には本土決戦に備えた軍隊が駐屯するなど緊迫の度合いを増してくる。その概要を示すと以下ようになる。

- 陸軍兵器補給廠小平分廠
陸軍少年通信兵学校など
→交通の便のよさと広大で安価な土地という条件
歩兵第503聯隊の化成国民学校駐屯
第65飛行場中隊の陣地構築
→本土決戦および本土防空戦に備えての軍隊の配置

今回はじめて展示した資料として化成国民学校の兵舎転用についての公文書がある。当時の化成国民学校は赤坂国民学校の疎開児童を受入れ、さらに縁故疎開の児童の流入により、ほぼパンク状態であった。化成国民学校は教室の大部分を兵舎として歩兵第503聯隊に提供し、児童は始業時間をずらす「二部授業」や「校外学習」で対応したが、勉強どころではなくなってしまった。

学校の兵舎転用は昭和20年3月9日と16日に閣議決定された「学童疎開強化要綱」などにもとづくものである。本来「区ノ存スル区域」が学童疎開の強化により空教室になったところを兵舎など緊急要件への転用という趣旨であったが「管内公立国民学校ニ関シテモ本要項ニ準ジ取扱フコト」というように、

適用が拡大されたものである。東村山地域は昭和20年に9回の空襲を受け、50余名とも70余名ともいわれる人々が亡くなった。しかし、東村山在住の児童の疎開が検討された形跡はなく、児童が勉強や勤労奉仕をしているかたわらで、本土決戦に備えた軍隊の訓練が行なわれていた。

■今後の戦争関連展示

毎年8月になると、原爆や終戦の日の関係で戦争への関心が高まる。その関心に答えていく役目が地域の博物館に求められるが、毎年戦争関連の企画展・特別展をするのは現実的ではないので、以下の方法を提案したい。

一つには、8月前半期におけるミニ企画展やロビー展示の実施である。この方式であれば、企画的にも無理がなく、省スペースで行なうことができる。展示品は写真パネルが中心となるであろうが、過去の展示で使用したものを校訂したり、速報展的なものと組み合わせて構成することもできるだろう。

二つには、企画展の中に戦争関連コーナーを組み入れる方法である。当館は平成22年夏に、企画展「湖郷一狭山丘陵の湖「多摩湖」「狭山湖」をめぐる5つの話」を実施したが、その中に「戦時中の貯水池」というコーナーを設け、村山・山口貯水池防衛工事といった戦時中の東村山の一つの特徴を紹介した。

三つには、巡回展の実施である。この方法は博物館側で企画する以外に、展示品の貸出しを積極的に行なうことも含まれる。昭和館のような貸出キットまでは準備できないにしても、使用した写真・解説パネルで、市民への貸出を想定しておくことは充分にあり得ることである。博物館は地域の戦跡とは場所が遠くなる場合も多く、巡回展を通じて戦跡をダイレクトに紹介できる一つの方法ともなっている。

■おわりに

満洲事変・日中全面戦争・太平洋戦争などいわゆる十五年戦争は、日本史的視点でとらえた場合は東京や多摩というエリアでとらえられ、その中の個々の自治体の状況に差はないのではないかと思われがちである。しかし、実際に歴史を調べ、展示の準備を進めていくと、個々の自治体独自の戦争関連展示ができてくる。学童集団疎開受入れ一つを見ても、受入れ側の別や対応の違いは見え、川を挟んで疎開する側と受入れ側に分かれる事例も出てくる。一つの地域をきめ細やかに調べられるのが、地域博物館の強みでもある。

戦後70年以上経過してしまうと、関係者の証言をとることは容易ではなくなる。それでも、関係資料の整理が進み、情報共有がなされてくると、記憶・記録の断片が新たな事実を浮かび上がらせることができ、一つの展示につなげることができるのである。米軍の空襲の記録は容易に閲覧することが可能となり、戦時中や戦後の空中写真も入手が容易で、文字通り、多摩の戦時中の全体像を視覚的に見ることができる。膨大な情報をいかに効果的につなげてわかりやすく提示し、悲惨な戦争の記憶を風化させないように歴史の「語り部」たることが、地域の博物館の果たす役割であると考えている。

「三橋國民 鎮魂70年目の夏」展

町田市立博物館 矢島律子

「三橋國民 鎮魂70年目の夏」展は、町田市主催、東京都共催、東京都芸術文化振興議員連盟・町田市議会文化芸術振興議員連盟後援、一般社団法人町田市文化協会・勝楽寺三橋國民鎮魂祈念館・紅土会協力のもと、2015年7月8日(水)から8月30日(日)まで、ちょうど夏休みと終戦記念日に合わせて開催された展覧会です。

2014年度に町田市名誉市民および東京都名誉都民に顕彰された三橋國民氏は、彫刻、絵画、書、工芸などジャンルにとらわれない多彩な作品を生み出してきました。古典に学び、新しい精神を生み出す気魄は94歳になっても衰えることはありません。三橋氏の創作活動の核心には、第二次世界大戦中のニューギニア戦線での経験と、そこから生まれた生涯のテーマ「鎮魂」そして「平和への祈念」があります。また、自分史エッセイ集『鳥の詩―死の鳥からの生還』(NHK出版 1995年)はNHKのラジオドラマとなったことでも知られています。本展が開催された2015年の夏は第二次世界大戦後70周年に当たり、三橋芸術の軌跡を紹介するにもっともふさわしいと考えました。

より多くの方にお出でいただく工夫として、展覧会を二部構成とし、第一部は、JR横浜線「町田駅」町田ターミナル口直



第二部会場 町田市立博物館入り口

結、小田急線町田駅西口から徒歩5分にある町田市文化交流センターホールで2015年7月8日(水曜日)から7月10日(金曜日)までの3日間開催し、翌週2015年7月14日(火曜日)から8月30日(日曜日)までを町田市立博物館で開催しました。また、教育目的が強いことから第一部、第二部とも、入館無料としました。第一部では三橋芸術の核心である「鎮魂」をテーマとした作品を集中的に展示し、第二部では、京都法住寺殿跡出土 雲龍文金銀象嵌鉄鍬形および十枚張兜鉢復元作品1件などを加えて三橋國民氏の多彩な造形活動の軌跡を総合的に捉え、一人の巨大な芸術家として紹介しました。総計して立体造形作品39点、絵画作品24点の展示でした。入場者数は約4000人と盛況で、全国各地から来場者がありました。展覧会に併せて、三橋氏自身が選んだ作品90点ほどを掲載した作品集を制作し、1部600円で販売しました。

玉川大学芸術学部/町田市立博物館連携ワークショップ

羽ばたけ! みんなの色とりどり

みんなで鳥になってみよう!

ワークショップ参加者募集

ワークショップ内容

ワークショップでは自分で着ることが出来る鳥のマントや帽子を作ります。いろいろな装飾をしてオリジナルの作品にします。大学生のお兄さんやお姉さんと一緒に楽しく作ります。最後に、完成した作品を着て写真の撮影をします。

概要

町田市立博物館では、この夏「三橋國民 鎮魂70年目の夏」展が開催されます。この運動企画として、6月20日に小学生を対象としたワークショップを実施します。作品は同博物館にて開催する「羽ばたけ! みんなの色とりどり」展にて展示します。

開催日 6月20日(土) 参加費無料

13:00 ~ 15:00 町田市立博物館

募集対象 小学 3,4,5,6年生

計5名程度の募集。先着順の受付で定員になりましたら締めの切りです。保護者様の見学も歓迎です。

【お申込み方法】 電話参加者の氏名・電話番号・学年を伺います

町田市立博物館 **042-726-1531**

【受付時間】 6月11日~6月17日 受付時間: 平日9時~17時

※ワークショップ当日は動きやすく、汚れても構わない服装で参加ください。
※ワークショップを開始する1週間前(6月10日)以降はすでに定員に達し、

会場 町田市立博物館5F / 玉川大学芸術学部 6F
2015年6月11日(金)~17日(木) 10時~17時

玉川大学ワークショップ募集チラシ

毎年夏の展覧会では、テーマにあわせて玉川大学芸術学部メディア・アーツ学科が小学生対象のワーク・ショップをおこない、その作品を展示する小展覧会を行ってきましたが、本年は三橋氏の著作や作品の重要なモチーフである「鳥」を選び、未来と平和をテーマに手作りの鳥の扮装を身につけた子ども

達の写真を核に構成したワーク・ショップ作品展示「はばたけ！みんなの色とりどり」を町田市立博物館講堂で開催しました。7月16日（木曜日）から19日（日曜日）までの4日間のみでしたが、来館者に未来への希望を感じさせ、三橋展との連動が成功し、好評でした。

有料広告をはじめ広報に力を入れた効果があり、朝日・読売・毎日・神奈川新聞ほか10社近くの新聞で記事になり、NHKなどテレビ数社に取り上げられました。

戦争の悲惨さ、理不尽さ、飢餓と戦いを通じて数十人の小隊のうちでたった2人の生き残りとなったことの意味、戦争を自分自身で考えることの大切さを、可能な限り多くの人々に伝えたいという、三橋國民氏の強烈な思いが関係者一同を牽引した展覧会だったといえるでしょう。ご高齢で体調万全でないなか、三橋氏は本展をたびたび訪れ、話しかけてくる来館者一人ひとりに終日応対されていました。

当館では来館者にA4ほどの分量の多いアンケート用紙を配っていますが、回答が1100枚ほどになり、3人に一人という高回答率となりました。集計の結果から、来館者の年齢層が広く、家族連れが多かったことがわかります。当館は古美術系の展覧会が多いこともあって50歳以上が多く、10歳代から30代の方、特に高校生・大学生が極めて少ない傾向がありますが、本展ではいつもより多数来館されました。熱心に見入る大学生を時々見かけました。町田市民が最も多く来館されましたが、北海道や大阪、石川など全国各地、またイギリスからも来館がありました。アンケートの最後には自由にご意見を書いていた欄を設けていますが、どのアンケートも心のこもった感想やメッセージが書き込まれており、なかには裏ページまで書き込まれている方がありました。それほど三橋氏の作品に感動し、深く戦争を考えざるを得ない展覧会となったというこ

とでしょう。三橋氏の作品のなかには悲惨なニューギニア戦線の状況を直視し、そのままを描いたものもあります。そのため最初「こわい」といていたお子様もいましたが、戦争を理解しようと逃げずに保護者の方と観覧したようです。戦争経験者からは消えない悲しみや戦争は再びあってはならないという強い言葉が聞かれました。

第二部の展示情景に感銘を受けたとのことで、ご親族からお申し出があり、願ってもない企画でしたので急遽準備をし、参加者を募集して、「三橋國民」展記念朗読会を8月22日（土曜日）と8月29日（土曜日）に町田市立博物館講堂で開催しました。どの会も満場のなか、三橋國民氏がニューギニア戦線での経験をまとめた自分史エッセイ集『鳥の詩一死の島からの生還』より各回3編を選んで、三橋しげ子氏が朗読しました。第一回では「兄からの手紙」／「吊り星のあがった夜」／「アンボン港」、第二回では「五粒の乾パン」／「老上等兵の死」／「アンボン港」が朗読されました。「アンボン港」の最後のくだりには、捕虜となって何とか生きてアンボン港に着岸した日本兵達に向かってインドネシアの少年が「誰か故郷を思わざる」という日本語の歌を歌いかける場面が出てくるのですが、ソプラノ歌手である三橋しげ子氏がその一節をくちずさむと、毎回会場のどこからともなく唱和の声が上がり、最後は大きな合唱となりました。この歌をよく知らない世代は、歌う世代の様子に強い感銘を受け、違った形で遠い戦争を身近に体感したようです。

三橋國民氏が東京都名誉都民、町田市名誉市民に顕彰されたことの意味を紹介し、その作品を初めて大規模公開したことで、町田市民、東京都民をはじめ多くの方々に戦争とは何かを体感していただけたようで、本展開催の目的はほぼ達せられたと考えています。



第二部会場大展示室左隅より概観

戦後70年、ふたつの平和祈念事業—戦争体験を次の世代に伝えるために—

調布市郷土博物館 金井安子

■はじめに

昭和49年(1974)11月に開館した調布市郷土博物館は、昭和53年(1978)に「災害・戦災と庶民の暮らし」展を開催しました。展示をきっかけに、戦時下の庶民の暮らしや兵士の体験を伝える資料が寄贈・寄託され、調布市域の戦中・戦後を語る資料の多くをこの頃に収集することができました。資料を寄贈していただいた時に、もっと詳細な聞き取り調査があればよかったと、戦後70年を経過した今になって残念に思われます。

その後、市民の戦争体験を伝える資料の展示は、しばらく行っていませんでしたが、平成2年(1990)から平成23年(2011)までは、博物館の移動展として公民館や文化会館を会場に、公民館や文化振興課と共催という形で開催してきました。公民館は、地域の方々の学習活動に利用され、さまざまなグループが施設を利用しています。調布市文化会館は、図書館、ギャラリー、展示室、ホール、会議室、学習室、創作室などの施設を擁する複合施設で、1日当たりの平均利用者数は5,600人余り(平成26年度)です。郷土博物館まで足を運びにくいという市民に、施設利用のついでに気軽に立ち寄ってのぞいていただけるというメリットを活かして展示を開催してきました。博物館の収蔵資料だけでは限りがあるため、市民に戦争体験を伝える資料の提供を呼びかけたり、他の博物館や研究者から資料をお借りして展示するなど、22回の平和展を実施しました。

戦後70年にあたる平成27年は、文化会館で平和の礎展2015「カメラがとらえた陸軍飛行場の戦中・戦後」、当館で「調布市民と戦争—戦後70年、戦争について知る」を開催しました。

■カメラがとらえた陸軍飛行場の戦中・戦後

東京都調布飛行場は、関東大震災後の東京の復興計画で、東京飛行場(現在の羽田空港)に次ぐ東京の空の玄関として建設が計画され、昭和16年(1941)4月30日に、東洋一の規模の民間飛行場が完成しました。しかし、8月には陸軍と東京府の協定により軍専用の飛行場として使用されることになりました。



調布飛行場に並ぶ戦闘機

同年7月に、防空を専任とする航空部隊が、東部・中部・西部の各軍に新編されました。東部軍司令官の指揮下に第17飛行

団が置かれ、東京府北多摩郡調布町に第17飛行団司令部・飛行第144戦隊・独立飛行第101中隊及び第14航空通信隊が、千葉県東葛郡柏町に飛行第5戦隊が置かれ、京浜地区の防空任務につきました。麴町区代官町(現在の千代田区竹橋付近)の東部軍作戦室に集められた各監視哨からの情報をもとに、浜松以東の東日本の戦闘指揮が調布作戦室を通じて行われ、調布飛行場は東部軍の中枢に連なる根拠飛行場でした。

飛行第144戦隊は、昭和16年(1941)7月30日に埼玉県の豊岡航空士官学校で編成完結し、9月に調布へ移駐しました。11月には、防空専任航空部隊の改編強化により第244戦隊に名称変更しました。以後、調布、浜松、鹿児島、八日市等において防空並びに特別攻撃隊の直接掩護に任じ、昭和20年(1945)8月15日、滋賀県八日市飛行場で停戦、8月31日に復員しました。

この飛行第244戦隊の記録写真を撮った菊池俊吉というカメラマンがいます。菊池氏は、大正5年(1916)に岩手県で生まれ、昭和13年(1938)、東京光芸社写真部に入社し、報道写真家の道を歩み始めました。昭和16年(1941)に東方社写真部に入社し、昭和17年創刊の陸軍参謀本部の対外宣伝グラフィック誌『FRONT』の写真部員となりました。第244戦隊の記録写真は、昭和20年(1945)2月頃に撮影されたと推察されています。

菊池氏が撮影した第244戦隊の写真は、『陸軍航空隊の記録第2集 菊池俊吉/全撮影』(文林堂、1995年)と『飛燕戦闘機隊—帝都防空の華、飛行第244戦隊写真史—』(大日本絵画、2004年)で紹介されています。『調布市史 下巻』編さんの際にも、調布飛行場の写真を提供していただきました。

戦後の調布飛行場については、航空ジャーナリスト協会顧問の藤原洋氏が撮影した写真をお借りして展示しました。昭和20年(1945)8月17日、当時、旧制都立航空工業高等専門学校1年生だった藤原氏は、敗戦で日本の飛行機が見られなくなるという思いから、クラスメイトと連れ立って中島飛行機三鷹研究所(現在の国際キリスト教大学キャンパス)に新鋭機を見に行きました。敗戦で混乱する研究所に見始められることなく入ることができて、目指す新鋭機を実見しました。その足で多磨墓地に立ち寄り、多くの飛行機が墓地内に隠されているのを目撃しました。10月頃から日曜日毎に千葉県稲毛から中央線に乗って、武蔵境駅から歩いて調布飛行場に通い、飛行機を撮影しました。毎年10月に行われる調布飛行場まつりで、格納庫を会場に「調布飛行場の歴史展」を開催した際に、藤原氏と昵懇の市民からご紹介いただき、藤原氏が貴重な写真を撮影されたことを初めて知りました。

菊池氏と藤原氏が撮影した戦中・戦後の調布飛行場の写真展を開催できればと企画を温めていましたが、戦後70年の節目の年にあたり、満を持して写真展を開催することにしました。展示開催は、朝日・毎日・読売・東京の新聞四紙で紹介され、

市外からも多くの方が見学に訪れました。藤原氏によるギャラリートークは、会場規模から当日先着20名で案内していましたが、結果的には84名が参加しました。



ギャラリートーク「終戦後の調布飛行場—昭和20年秋」

昭和20年8月15日以後の調布飛行場は、進駐軍の接收に備えて、飛行機はプロペラを外して飛ばない状態にされ、施設や設備、兵器などの引渡し目録が作成されたと考えられます。米軍は、9月2日のミズーリ号上での降伏文書調印の直後に、立川・多摩・調布など東京周辺の飛行場に進駐しました。調布飛行場は、9月3日深夜から4日にかけて進駐軍が入っています。

戦時中の飛行第244戦隊の隊員や整備兵たちの写真、戦後の飛行場に放置された破壊された飛行機の数々。同じ昭和20年に撮影されたとは思えないこれらの写真は、ご覧になった方に強い印象を与えたようです。

特に、今まで知らなかったという感想が多く寄せられたのは、米海軍の艦船への体当たり攻撃専用に急ぎよ設計された特殊攻撃機「剣(つるぎ)」です。日本の敗色濃厚となった昭和20年(1945)1月、陸軍からの開発指示により、中島飛行機株式会社がわずか2ヶ月余りで試作機を完成、終戦までに100機以上が生産されました。出撃後、戻ってくることもない剣の材料は木材、ブリキ板、鉄パイプなどで、胴体下面に250kgか500kgの爆弾が固定されていました。しかし、実際には出撃せずに終戦になりました。特攻出撃専用のため、脚は離陸と同時に投下され、着陸のことは考えられていないという飛行機です。藤原氏は、剣のテストパイロットだった方から聞いた「(テスト機には脚が付いていたが)、いつか自分はこの飛行機で命を落とすことになるかもしれないと思っていた」というエピソードを紹介されました。中島飛行機株式会社で剣の設計者の部下として勤務していた方が、展示を見に来場されるという思いがけない出会いもありました。



特殊攻撃機「剣」(藤原洋氏撮影)

■調布市民と戦争—戦後70年、戦争について知る

郷土博物館では、市民から寄贈・寄託された戦争の体験や記憶を伝える資料を「出征した兵士たち」「空襲の記憶」「戦時下の暮らし」「戦時下の子ども」「陸軍飛行場」のテーマに分けて展示しました。展示資料のキャプションの作成にあたって、資料の解説にとどまらず、資料を博物館に託された方の思いを伝えるよう心がけました。

亡くなった父親の使った飯盒を寄贈する時に、わざわざ親戚に尋ねて、寄贈者がよく知らなかった父親の出征体験を聞いてくれた方、昭和20年3月10日の空襲で家族を亡くされ、自身も大火傷を負った方、被爆体験を伝えるために、絵を習って原爆の記憶を絵に描き、外国人に「直接体験を語りたい」と72歳で米国へ語学留学した方、原爆被害を戦後初めてカラーで特集したグラフ雑誌に添えられた「資料として保管してください」のメモ、この雑誌の発行は昭和27年(1952)8月6日付けで、「サンフランシスコ講和条約」が同年4月28日に発効したことを受けて被爆者のカラー写真が掲載されたことに、今回の展示で気がつきました。市報(平成16年3月20日号)に掲載した郷土博物館の資料紹介「千人針」を読んだ市民から市の広報課に届いた「記事を読み、頭の奥から出てきた、耳で覚えた千人針のうた」の歌詞を綴った葉書は、千人針とともに展示しました。

出征した兵士に関する資料で最も多いのは軍服等の軍装品です。収集を始めた頃は、簡単に「軍服」として登録していましたが、現在では「陸軍兵用三式軍衣袴(昭和18年制定、冬用)」というような詳しい情報を登録するようにしています。また、着用者がどのような戦争体験を持っているかも聞き取るようにしています。兵士だった方から提供していただいた資料だけでは、同じようなものばかりになりがちなところを補完できる資料として、コレクターの収集品も受け入れています。

今回の展示は、戦争体験のある来館者にとっては、自分の



「出兵した兵士」展示風景

記憶がよみがえる場であり、戦争を知らない世代にとっては、戦争の記憶を継承する場であり、どちらも展示資料と対話することで、展示を自分とかかわりのあるものと受けとめていただけたと思います。市民の戦争体験を次の世代に伝えるために、所蔵資料を保存、活用することは博物館の重要な使命です。今後も展示を通して、世代を越えてモノと人をつなげる存在であり続けたいと思います。

「平和のための戦争資料展」開催について

福生市郷土資料室 針谷もえぎ

■はじめに

福生市郷土資料室では、毎年7月から9月にかけて「平和のための戦争資料展」という統一のテーマの企画展示を開催している(以下「戦争資料展」という)。この展示は終戦の日に合わせて、市民に戦争や平和について考えてもらうことを目的に企画されるもので、毎年さまざまな戦争関係資料を展示している。郷土資料室では年間4回の企画展示と1回の特別展示を行っているが、そのうち夏期シーズンの展示は平成8年度から「戦争資料展」が恒例となり、毎年開催されている。

福生における近代戦争の歴史は日清戦争にはじまる。現在の福生市域から日清戦争で12名、日露戦争で78名が出征している。昭和になると市域東側には陸軍航空立川支廠熊川出張所(熊川倉庫)や陸軍多摩飛行場が開設され、そこに陸軍航空審査部や航空整備学校など軍の関連施設が置かれ、福生は多摩飛行場をささえる基地の街となった。そして戦後の接収により飛行場は米軍横田基地となった。また戦時中の昭和15年には福生村と熊川村が合併し、福生市の前身となる福生町が誕生している。福生において戦争の歴史は町の成り立ちともかかわり、福生の近代史を語るうえで重要なものとなっている。

■「戦争資料展」の概要

郷土資料室では約700点の戦争関係資料を所蔵するが、そのほとんどは市民からの寄贈品である。他に寄託資料の中にも戦争錦絵や軍事郵便などの関連資料が含まれている。すべてが展示できる状態のものではないが、これらのなかから福生市域にかかわるものを中心に資料を選び、毎年70~100点ほどを展示している。

展示の構成は、明治から昭和に至る近代史をたどりながら、福生にかかわる戦争資料を展示する形をとっている。これは他の博物館では常設されるような通史展示のスペースが、郷土資料室にはほとんどないため、それを補うために「戦争資料展」の中で福生の近代史も扱うようにしているからである。

平成19年には「戦争資料展」の集大成として、図録『近代戦争のあゆみと戦時下の福生—平和のための戦争資料展—』を発行した。この図録は毎年掲示するパネルの要約やさまざまな戦争資料を掲載している。福生にかかわる主要な戦争資料をまとめた図録となっているので、その後の戦争展示でも引き続き販売することができ、平成22年度に再版するほどの好評を得ている。

一方でテーマを決め、特定の戦争関係資料を集めて展示する場合もある。平成12年度は戦争関係の新聞号外展、平成22年度は戦時中の学校や子どもに焦点を当てた展示をした。平成16年度は日露戦争100年に関連し、寄託されている日露戦争の戦争錦絵など115点を展示したが、戦争錦絵を一堂に並べた展示はあまりないことから、発行した図録が完売する

ほどの好況であった。

また小学生向けにはワークシートも用意している。郷土資料室ではどの企画展示でもワークシートを製作しているが、これは単に資料を見るだけでなく、設問に答えていくことで理解をより深めてもらうねらいがある。参加シールを集めると景品がもらえることもあり、多くの小学生やその家族にも参加してもらっている。

設問は「戦争資料展」の場合、当時の生活などなるべく身近な話題を取り上げるようにしている。これは小学生にとって「戦争」という概念自体が非常に難しいので、身近な話題の方が取り組みやすいと考えるからである。戦時中に使われていた品物の名前やくらしのようすを知ったり、当時の日常生活が今とどのように違ったのかを理解したりすることが、戦争について深く考えるきっかけになればと思っている。



■平成27年度の「戦争資料展」

今年度の「戦争資料展」では戦後70年ということを見野に、昭和期の戦争に焦点を当てた展示構成にした。そのため福生の近代史のうち明治大正期の部分を省き、支那事変から太平洋戦争までの時代の流れを追いながら、約100点の関連資料



を展示した。

各コーナーの主な資料と出品点数は次の通りである。

- ①導入部分（支那事変と町制施行） 支那事変従軍記章、福生町町制施行記念盃など9点
- ②銃後の生活 購入通帳、衣料切符、戦時国債、国民服、戦争紙芝居、戦時中の雑誌など29点
- ③空襲 伝単、灯火管制電球など16点
- ④国民学校 学校日誌、墨塗り教科書など4点
- ⑤軍事郵便 軍事郵便、ポスターなど9点
- ⑥出征 出征の幟、千人針、慰問袋など12点
- ⑦多摩飛行場 記念盃、燃料貯蔵瓶、掩体壕調査資料など6点
- ⑧戦時中の写真 18点

展示室の形態や展示ケースのサイズ、配置の問題から、取り上げるトピックや資料を制限しなければならなかったが、戦時中の身近な生活用品から当時のくらしを見てもらうために、②銃後の生活や③空襲にかかわる資料の展示を充実させた。

②銃後の生活にかかわる資料は、味噌や醤油の購入通帳、衣料切符、国民服などの基本的な資料を展示し、詳しい解説をつけた。また当時のスローガンが記された戦争紙芝居や、戦時中の雑誌『写真週報』、防空服や防空頭巾の作り方を特集した『婦人倶楽部』などを展示した。このほかに戦時中の子どもの生活がわかる資料として、子ども用の国民服、『愛国百人一首』や戦争絵のメンコなどのおもちゃ、勤労働員のようすがわかる小学校の日誌類なども展示した。

③空襲のコーナーでは、灯火管制のようすを再現した。灯火管制用の電灯カサや専用の電球とともに、風呂敷で覆った白熱球をケース内に掲げ、実際に明かりをつけて暗い光を体感できるようにした。また福生の警戒・空襲警報を記録した「福生第一国民学校防空日誌」や、熊川に落ちた爆弾の破片と焼夷弾の尾部、八王子などの空襲を予告した伝単なども展示した。

福生市で特異な資料としては、⑦多摩飛行場の関係資料がある。現在の米軍横田基地は戦時中には陸軍多摩飛行場で、軍の関連施設がおかれていた。そのため横田基地には旧日本軍が使用していた建物や遺物が遺され、郷土資料室ではたびたび基地から関連品の寄贈を受けている。今回展示した燃料貯蔵瓶も平成14年に基地内で工事中に地中から発見され、寄贈を受けたものである。ロケットエンジン用の過酸化水素を貯蔵するためのもので、多摩飛行場内にあった陸軍航空審査部が行った飛行機エンジンや燃料のテストに関連するものとされている。

また福生市では、平成25年度に横田基地内の五日市街道沿いに残る掩体壕1基の測量調査を行ったが、その調査資料も今回初めて公開した。この掩体壕は多摩飛行場時代につくられたもので、熊川倉庫の燃料を退避するために使っていたとされる。航空写真でみると、現在も付近には3基の掩体壕があることが確認できたので、測量図とともに航空写真も展示した。

これに加えて掩体壕の現地見学会も行った。場所が基地内のため、見学は五日市街道沿いのフェンスの外から眺めるだけとなったので、東大和市の旧日立航空機株式会社立川工場変電所の見学も併せて行い、12名に参加いただいた。

■「戦争資料展」を毎年開催するということ

先にも述べたように、戦争関連の展示を毎年企画するのは、市民に戦争に対する意識や関心を持ち続けてもらうためである。

しかし同じような展示企画を続けていると、マンネリ化するというデメリットもでてくる。戦争関連展示に限らず常設展示にもいえることだが、いつも同じ展示品が出ていると前に見た時と変わっていないという印象になってしまう。「戦争資料展」では、衣料切符や購入通帳などの基本的な資料ほど毎年出品することになるので、そればかり並べているとインパクトの薄い展示になってしまう。

そのため部分的に特集コーナーやトピックを設けたり、あまり出すことのない資料を展示したりするなどの工夫をしている。平成26年度は特集コーナーとして日露戦争期の軍事郵便を展示し、市内旧家の古文書類に含まれるハガキや封書から戦況や兵士の生活などを紹介した。また婦人雑誌から戦時中のくらしや防空対策の記事を集めた特集をしたこともある。

一方でメリットもある。展示された資料を見て、うちにも同じようなものがあるからと寄贈を申し出てくれる市民が多く、資料が自然に集まってくる。

資料の寄贈は、貼紙や広報などで募ってもなかなか集まらないものである。おそらく「戦争中に使ったものを集めています」といっても、市民にとっては具体的なイメージにつながらないのではないだろうか。しかし展示室で実物を見ると、「これを集めているのか、こんなものが資料になるのか」とわかり、寄贈につながっていくのではないだろうか。日常生活で普通に使われていたものほど資料としての価値は見出されにくいのが、展示品を見ることで、実際には価値のあるものとして位置づけられるのであろう。

このような経緯でこれまでに様々な資料の寄贈があり、戦争関係の収蔵品も着実に増えている。最近では国民服、灯火管制用の電球、軍事郵便、軍隊手帳、『写真週報』などの寄贈を受けた。これらの寄贈品は翌年の展示に出品するようにしている。

■おわりに

「戦争資料展」を毎年開催していて感じるのは、戦争を伝えることの難しさである。負の歴史は語りにくく、受け取る側も暗い気分になる。しかしそれを次世代に伝えていくことは、地域博物館にとって重要な役割ではないだろうか。毎年この時期に展示を見ることが戦争について考えるきっかけとなり、戦争を知る世代はもちろん、戦争を経験しない世代や「戦争ってなに？」という小学生にまで、過去の戦争と現在の平和の大切さを再確認してもらい機会になればと思う。



「戦後70年 日野市郷土資料館の取り組み」

日野市郷土資料館 秦 哲子

■はじめに

昨年は戦後70年の節目の年とのことで、各地で戦争と平和にかかわる催し物が多数開催され、また折りしも集団的自衛権の解釈変更に伴うデモが各地で行われ、国民の間でも平和への関心が高まった年でもあった。

このようななか、日野市では、8月を平和月間と位置づけ、文化スポーツ課・公民館・図書館・郷土資料館が合同で、「千羽鶴を作って広島に送ろう」「平和映画の集い」「広島・長崎原爆展」「平和をテーマにした図書展示」「平和展（市内巡回パネル展示）」など様々な行事を行った。

なかでも公民館は、「8月に何があった～次の世代に伝える戦争と平和」という公演の中で、早乙女勝元氏による記念講演と市内在住戦争体験者の語り、朗読・合唱などが行われた。また市民から寄せられた戦争体験をまとめた小冊子も作成した。

郷土資料館では、市内巡回用のパネルを作成した。巡回展のため、実物資料は写真で載せ、市内の戦争にかかわりのある場所やモノを紹介した。そして郷土資料館では、その集大成として、10月10日～翌11月11日まで資料館企画展示室で「平和の尊さを語り継ぐまち～戦後70年平和展」を開催した。

■『戦後50年記念平和事業 戦争資料展』(前回)

日野市では、平成7年(1995年)の戦後50年に際し、『戦後50年記念平和事業 戦争資料展』を開催したが、その時と今回の戦後70年展示では明らかに違った。どのように違ったのか、まずは戦後50年展示について振り返ってみることにする。

『戦後50年記念平和事業 戦争資料展』に際しては、市広報を通じて、市民から、戦争にかかわる資料の提供を呼びかけ、そこで収集された資料をもとに、その年の4月から1年間、テーマ別に全7回の企画コーナー展を行った。その時の資料提供者数は110名、集まった資料は2,050点に及んだ。

年間を通じて開催したせいか、徐々に話が広がり、特に第6回展示「満蒙開拓と日野」の回では、NHKドラマ「大地の子」が丁度放送された偶然も重なり、京王線の沿線行事の車内広告にも取り上げられ、この展示を知ってはるばる足立区の方からやって来られた方もおられた。

その方は、ちようれいほしじよう長岑八丈開拓団におられた方で、中国人の夫は揚子江の大洪水で亡くなり、残留婦人として子どもといっしょに日本に引き揚げて来たという。その時うかがったお名前から、東京都が昭和37年に出した東京都関連の開拓団報告書の中で行方不明者として記載されていた方だったことがわかり、戦争が過去のものではなく、今なお継続しているものなのだとすることを当時強く感じた覚えがある。

現在の日野市域のおよそ半分を構成する旧七生村には、満洲への分村計画があり、満洲国の首都新京の近郊にある新京東京報国農場では、耕作地と開拓地の約半分が七生村分とし

て確保されていたという。満洲国政府の開拓局局長であった五十子巻三が七生村出身であったこともあってか、七生村には「東京府拓務訓練所」という、満洲への開拓希望者のための訓練施設もあった。

展示期間中には、満洲東京報国農場に渡ったもと七生村勤労奉仕隊員の方々に、満洲の印象、報国農場での生活、そして昭和20年8月15日以降の命からがらの脱出劇や新京での避難生活、引き揚げて故郷に帰還し、高幡山が見えた瞬間、胸の熱くなった想いを語ってもらった。

また、もと満蒙開拓青少年義勇軍だった方が提供してくれた「来たれ、満洲へ!」で終わる国策フィルムの上映会を行い、当時、国民の間に、満洲開拓がどのように喧伝されていたのかを知ることができた。

第4回展示「焼け跡からの出発」では、守屋式改良かまどや平山AHSクラブなど、戦後の生活改善で有名で、昭和26年にはリッジウェイ大將が視察にまで来た七生村のことを、当時の生活改良普及員の方に話してもらった。

■『平和の尊さを語り継ぐまち～戦後70年平和展』(今回)

では今回の戦後70年平和展の時はどうであったのだろうか。戦後70年平和展では、戦後50年展の時と同じく市広報で資料収集を試みたが、結果は芳しくなかった。また戦後50年展の時のように、当事者本人からの資料提供はほとんどなく、大部分は娘さんや息子さんからの提供であった。

なかには、資料を見せてもらいに行き、資料にまつわる話を聞いて記録をとり、いざ展示のために資料借用という段になって、所蔵者の方が入院し、実物資料の展示が難しくなるものもあった。戦後70年平和展で収集した資料だけでは展示点数が足りなかったため、戦後50年展で収集した資料を大幅に加えて展示を構成した。

戦後50年展の時は、当事者たちから寄贈の申し出を受けたのに対し、今回の展示では、親が所蔵していたものを、また戦死した父親の形見を、娘や息子たちが寄贈してくれる例がほとんどであった。

戦後70年を経た今日では、当事者たちが死亡、もしくは資料を提供できるような状態にはないことが考えられ、戦後70年という「時」を感じさせる収集結果であった。今となっては、戦後50年展の際に、積極的な資料収集活動を行って本当に良かった…とつくづく思うが、逆に戦争をじかに経験した人たちがいなくなろうとしている収集結果となり、今や戦争が「過去」のものになりつつあるという現実を、如実に見せつけられた気がした。

■戦後70年、小・中学校及びデイ・サービスと日野市郷土資料館

戦後70年の昨年は、夏に中学校の社会科教員を対象に、

慰霊塔や戦没兵士の墓、空襲の傷跡を今に伝える神社の鳥居や空襲犠牲者を祀ったお地蔵様、松根油採取痕の残る松の木やもと疎開学童たちが平和への願いと疎開時の感謝を込めて奉納した弘法大師像などの戦争ゆかりの地を見てまわる見学会を行った。

また中学一年生の総合学習における地域学習のテーマの一つとして、戦争について調べに来た生徒たちがいた。

秋の小学3年生の見学に際しては、国語科の『ちいちゃんのかげおくり』に合わせて、防空頭巾や焼夷弾破片、兵隊さんの服や戦地から送られた父親の手紙、残された兵士たちの遺品、学童疎開に来た子どもたちのことなどを紹介した。

郷土資料館には、デイ・サービスの高齢者の方たちが見学に来ることがよくある。若かりし頃、使った民具に触れて、化石を見、縄文土器を持たせてもらい、知的好奇心と懐かしさに満たされて満足して帰っていかれる。しかし今回の戦後70年平和展では、当時の記憶が思い起こされたのか、涙ぐむ方もおられた。戦争を経験している世代と経験していない世代の違いがそこには見られた。

表『昭和三十七年度戦没者名簿』による日野市域の戦没者一覧表を見てみると、その戦没地域が、満洲及び関東州方面、北方・ソビエト方面、朝鮮、中国各地、沖縄方面、フィリピン方面、香港、タイ・ビルマ方面、ジャワ・スマトラ・ボルネオ方面、ニューギニア・ソロモン方面、太平洋方面（トラック島・サイパン島・テニアン島含む）、硫黄島・小笠原・本州近海付近など、日野市一つとっても、日中戦争から太平洋戦争にかけての日本の戦争地域ほぼ全域と見事一致し、先の戦争が、国民全体を巻き込んだ戦争であったということが浮き彫りになる。

戦争を経験した多くの方々がすでにこの世を去り、当時子どもだった人も高齢となっている現在、戦争の惨禍を再び繰り返さないためにも、前の世代が経験した戦争の記憶を、私たち地域博物館は、どのように伝えていけばいいのだろうか。

■地域博物館の役割～研修会に参加して

先だって東京都三多摩公立博物館協議会と三多摩地域資料研究会が合同で開催したシンポジウム「戦後70年を考えるー戦争体験を次の世代に伝えるためにー」に参加した。

新井勝紘氏の基調講演の標題自体が、戦争の体験・記憶を、単なる個人的な記憶にとどめるのではなく、記憶を記録化することによって、次の世代に戦争体験・記憶を継承していくという、次世代に引き継いでいくためのプロセスを提示するものであった。

また八王子市郷土資料館の美甘氏は、戦争を体験していない世代に、戦争の体験・記憶を伝えていくためには、単なる資料（モノ）の展示にとどまらず、更なる「工夫」が必要であるという。罹災証明書だけを見せられても、戦争を体験していない世代へは戦争というものの本質が伝わりにくく、空襲など実際に戦争を体験した人の生の声や表情といった「語り」を伴ってこそ、人間同士伝わるものがあると語られた。現在は戦争を経験した世代の聞き取りができる最後の機会であり、その戦

争体験者の語りを映像なども含めて記録し、後世に伝えていくことこそが、これから戦争体験を継承していく上で重要なことであると指摘された。

出征兵士として従軍した人、勤労奉仕で動員された人、親元を離れて疎開した子どもたち、銃後の守りを任された人々、そして空襲や食糧難。戦争体験者に語ってもらうことで、戦争の記憶を風化させずに記録保存し、次の世代に伝えていくこと。戦争体験者の語りを聞いて、残された当時の資料を見て、日本人がこれまで歩んできた戦争の歴史と向き合いながら、今ある平和をかみしめ、「これからの平和」について考える機会を提供すること。これが、失われつつある戦争体験を次世代に引き継ぐ地域博物館の重要な役割の一つであると考えられる。戦後70年を経過したことにより、次世代への記憶継承という重要課題が浮き彫りになった今、戦後70年と言わず、これからも継続してこの問題に取り組んでいき、地域博物館が、世代間の記憶引き継ぎのかけ橋となれば・・・と思う。

表 日野町役場民生課『昭和三十七年度戦没者名簿』にみる日野市域の戦没者たち

戦没地域		陸軍	海軍	その他	合計
満洲及び関東州方面		24	0	2	26
朝	鮮	0	0	1	1
香	港	1	0	0	1
台	湾	3	0	1	4
北方・ソビエト方面		7	1	1	9
中 国	山 東 省	7	0	0	7
	河 北 省	5	0	0	5
	天 津	1	0	0	1
	山 西 省	3	0	0	3
	甘 肅 省	1	0	0	1
	河 南 省	7	0	1	8
	上 海	5	0	1	6
	江 蘇 省	4	0	0	4
	四 川 省	2	0	0	2
	湖 北 省	4	0	0	4
	湖 南 省	10	0	0	10
	広 西 省	1	0	0	1
	広 東 省	1	0	0	1
	北 支 方 面	8	0	0	8
中 支 方 面	6	0	0	6	
海 上	4	15	0	19	
仏印・タイ・ビルマ方面		30	0	0	30
ジャワ・スマトラ・ボルネオ方面		9	1	2	12
ニューギニア・ソロモン方面		31	2	1	34
南 方 方 面		4	0	0	4
太 平 洋 方 面		13	11	1	25
フ ィ リ ピ ン 方 面		74	19	3	96
沖 縄 方 面		10	1	1	12
硫黄島・小笠原・本州近海付近		8	7	0	15
日 本 国 内 死 亡		19	6	0	25
戦 災 に よ る 死 亡		0	0	9	9
合 計		302	63	24	389

山田櫻考案 野口啓助試作 模型防毒面

小金井市文化財センター 多田 哲

当館では平成27年11月3日から12月20日まで、秋の企画展「戦時下の生活」を開催した。その中のひとつに「手作り防毒」と題したコーナーを設け、手作りによる対毒ガス用具の展示を行った。その中心となった展示が「模型防毒面」である。

近代化学兵器としての毒ガスの使用は、第一次世界大戦に始まる。旧日本軍いうところの「あお剤」こと窒息性のホスゲンや塩素ガス、「きい剤」こと糜爛性のマスタードガスやレイサイト、「みどり剤」こと催涙性のクロロアセトフェノンなど、数多くの毒ガスが第一次大戦中に開発された。連合国・枢軸国共に、毒ガス対策は出征兵士のみならず銃後の備えの重要な柱であった。日本でも戦前から警戒がなされ、全国各地に今もなお残る防空訓練に使用された防毒面（防毒マスク）は、その何よりの証拠である。

市販された民生用の防毒面には、学生や一般市民が使用する毒ガス濾過フィルターである吸収缶が顔面にある廉価な直結式と、警防団が使用するより高度な処理能力を持つ吸収缶を首やベルトに下げ携行する隔離式があった。理想はすべての国民が防毒面を所持することだが、現実には末端まで行き渡ることはなかった。あらゆる局面において物資に乏しい戦時下では、無いものは自作するより手立てがない。もとより燈火管制の遮光隠蔽に際して、紙や布を電球に巻いたり窓に張るなど、防空体制は多分に「工作的」手作業に負うところが大きかった。そんな中、対毒ガス用具をも身近なもので自作する発想が生まれてくる。展示で取り上げた手作りによる毒ガス対策用具は以下の三つである。

■模型防毒面 別名「簡易応急防毒面」

障子紙で頭部を覆う覆面部を作り、口にくわえる管の先には紙で作った吸収箱が付いている。吸収箱内部は炭粒が脱脂綿にはさまれて詰められ、毒ガス濾過フィルターの役割を果たす。覆面部を布きれて、吸収箱を空き缶で作るタイプもある。写真Aは後述する⑧『初等科工作』所載の設計図面をもとに展示用に製作したもの。吸収箱の上部は、中に詰めた活性炭を見せるため透明にしてある。実際に試作してみると、口にくわえる管と吸収箱の接合部が余りに脆弱で悩まされた。管は本来、ゴムもしくは竹管を用いるが、同直径の亚克力管で代用した。

■応急吸収缶 別名「防毒壘」「簡易吸収缶」「代用吸収缶」

基本的に模型防毒面の覆面部がないもので、口にくわえる管の先には空き缶で作る吸収缶が付いている。吸収缶の内部は模型防毒面の吸収箱と同様。空きビンで作れば管を接合する必要はなくなるが、ガラスの底を切らなければならない。

■鼻挟（鼻挟み）

口に濾過器が付いた管をくわえても、鼻から吸い込む毒ガス

に対しては防御できない。そこで針金を曲げて作る「鼻挟」で、補助的に鼻をはさむ。洗濯バサミでも代用可。写真Bは後述する文献⑦・⑨をもとに試作したもの。

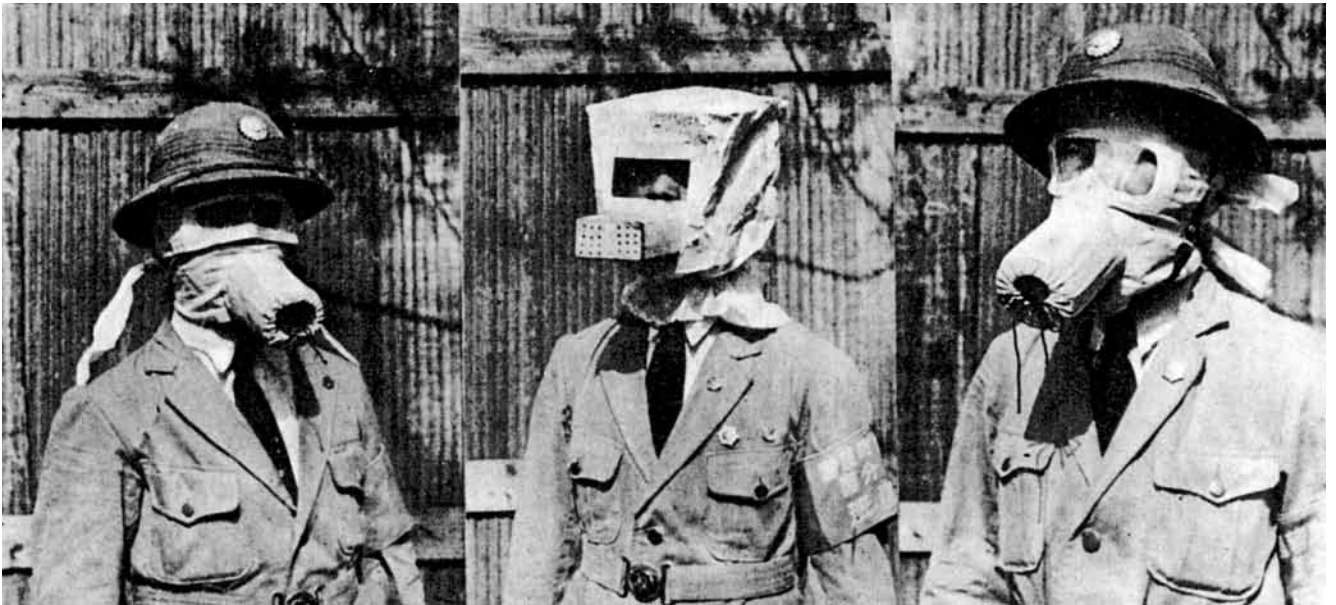
この他にも、隙間の多い日本家屋をテープや反故紙で目貼りする「防毒室」や、セロファンで作り室内に張る「防毒蚊帳」などがある。興味のある方は本稿に載せた文献以外にも、『写真週報 第29号』昭和13年8月31日掲載「防空おぼえ帖」などを参照されたい。以下、参考にした手作りによる対毒ガス用具を載せた文献を年代順に見ていく。



A. 模型防毒面



B. 鼻挟



C.『わが家の防空』より

①東部防衛司令部 編『わが家の防空』昭和11年6月

防空法が公布される昭和12年の前年に、防空対策を一般国民向けに写真で分かりやすく解説した折りたたみ式パンフレット。写真Cは管見の限り、最も早い時期の手作りによる防毒面の写真。中央が紙製の模型防毒面。左右は吸収缶を茶筒で作成、覆面部を手ぬぐいなどの布きりで作るタイプか。防毒眼鏡をしているようだ。この写真は市販の防毒面の写真と並んで、何の説明文もなしに唐突に載せられている。

②少年倶楽部 昭和11年7月号付録

海野十三『愛国防空小説 空襲警報』

表紙に「東部防衛司令部指導」とあり、一冊すべてが典型的な国策プロパガンダである。小説だけではなく、巻末に「わが家の防空準備」と「紙で出来る防毒面の作り方」を付す。

小説は日本SFの始祖として知られる海野十三が、防空対策を手際よく物語化している。列車内で針金を曲げて鼻挟を作り、空き瓶で防毒壘を急造する場面があり、文献上の初出かと思われる。Dは学生が防毒壘を口にしている挿し絵。鼻挟や防毒壘は海野自身のアイデアではなく、軍関係者や後述する野口啓助から情報提供を受けたのではないだろうか。他にも「孝行の防毒室」など、短編中に毒ガス対策の要点が見事に盛り込まれている。

「わが家の防空準備」は防空対策教化のための見開きページの漫画。防毒室や防毒蚊帳はもちろんのこと、毒ガス消毒のために晒し粉を買うお手伝いさんや、「手製の応急マスク」を作っているおじいさんが描かれている。

「紙で出来る防毒面の作り方」は著者名は無いが、設計図面を載せた最も古い文献であろう。図Eはその完成予想図。本書は少年誌付録の小冊子でありながら、この時点ですべての手作り毒ガス対策用具が出揃っている侮り難い内容である。

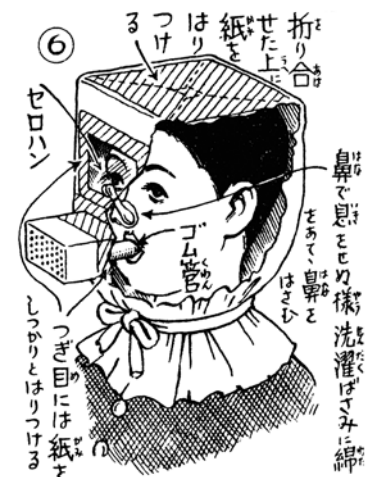
③『少年倶楽部』昭和12年9月号

野口啓助「防毒面の作り方と毒瓦斯の消毒法」

同誌前月号に野口啓助は東部防衛司令部の校閲により「空襲と防毒面の話」を書いている。前月号で毒ガスの種類と市販防毒面の基礎知識を解説をしたのち、本号で紙製の簡易防毒面の作り方を教えている。図版は前掲②「紙で出来る防毒面の作り方」とほぼ同じ。



D.『愛国防空小説 空襲警報』より



E.「紙で出来る防毒面の作り方」より

④文部省普通学務局 編

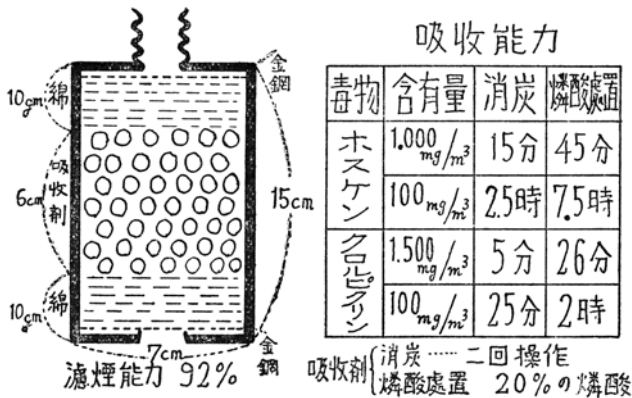
『防空と簡易燈火管制用具及簡易応急防毒面の製作法』

昭和12年9月

本書と⑤は自作による防毒面の基本文献と目される。はしがきには「全国小学校、中等学校並びに師範学校等に頒布し理科、手工又は作業科実習用の参考となすと共に児童生徒の防空思想の普及に資せんとするものなり」とある。同年8月の東京市小学校手工科教員講習会における東部防衛司令部小川市蔵と大日本国防化学協会野口啓助の講演をまとめたもので、第四章「応急防毒面の製作法」は野口啓助によるものであろう。国防化学協会は全国薬剤師の国策糾合同体。本文中には「防衛司令部の御命令に依り或る少年雑誌に防毒面の製作方法を掲載致しました所、それに依って立派なものをお作りになって、これで宜しかと云うて協会の方へお持ちになった方がある位」とある。「或る少年雑誌」とは前掲②のことであろう。従って「紙で出来る防毒面の作り方」の著者は野口啓助と推定できる。

本書にはにわかには信じ難いが、この紙製防毒マスクの濾過能力を示す表まで付されている。図Fの左は吸収箱の断面図で、上が口にくわえる管。右は吸収箱の毒ガス濾過能力の表。窒息性毒ガスであるホスゲンとクロルピクリンに対して、吸収剤として消し炭とリン酸液に浸した炭を使用した場合、どれだけの時間持ち堪えられるのかを示す。なお、本書は明治薬科大学の校友会誌『明友薬剤誌』に、模型防毒面の具体的製作法が省略されて転載されている。

簡易防毒面製作参考



F.『防空と簡易燈火管制用具及簡易応急防毒面の製作法』より

⑤野口啓助『國民防毒読本』昭和12年9月18日

前掲④と期を一にして発行されている。頒布先が限られていた④に対して、こちらは一般国民向けであろう。発行所は野口啓助の主宰する「大日本国防化学研究所」。応急防毒面と鼻挟みの製作法を載せる。図は展開図のみならず、前掲図Fまで④と同様。鼻挟みの形状は、本書だけが他書と異なっている。初版では紙製応急防毒面の製作法が載せられたが、翌年の増補訂正の際、より気密性の高い手ぬぐいで覆面部を作り、吸収缶を茶筒で作るタイプに変更している。写真C左右の応

急防毒面と酷似しているが、覆面部の目出し部分は手ぬぐいで透明なセルロイド板を縫い付けたもの。

本書で最も注目に値するのは、応急防毒面の考案者を「陸軍科学研究所技師山田櫻氏」と明記している点。陸軍科学研究所は陸軍技術研究所の前身であり、山田櫻はのちに登戸研究所第二科の科長に就任、『陸軍登戸研究所の真実』の著者伴繁雄の上司に当たる。

⑥赤十字博物館 編『防空図解』昭和13年6月

東部・中部・西部各防衛司令部の指導により製作された大型掛け図。「第一輯 一般防空」「第二輯 燈火管制」「第三輯 防火」「第四輯 防毒」の四部から成る。「第一輯 一般防空」には、紙製防毒面を作る母と娘の絵(G)が描かれている。おぶった子供とかぶる「親子防毒着」もある。これは防毒蚊帳の応用であろう。「第四輯 防毒」には、「都市瓦斯攻撃の惨害」と題して、東京駅周辺が毒ガス攻撃に曝されている何やら黙示録的な絵が載せられている。「手製簡易マスク」の表題のもとには、紙製防毒マスクは勿論のこと、吸収缶を空き缶で作るタイプも見受けられる。その他、赤ちゃんを入れる酸素供給具付きの「防毒鞆」や、やはり防毒蚊帳の応用と思われる「防毒乳母車」など、多様なアイデアがさしたる説明もなしに満載されている。



應急防毒面の製作を覚えておく

G.『防空図解』より

⑦内務省計画局 編 大日本防空協会 発行
『少年防空読本』昭和16年3月
応急吸収缶と鼻挟の製作用図面を載せる。

⑧文部省 編『初等科工作 二 男子用』昭和17年3月
文部省 編『初等科工作 二 女子用』昭和17年3月
文部省 編『初等科工作 二 教師用』昭和17年4月

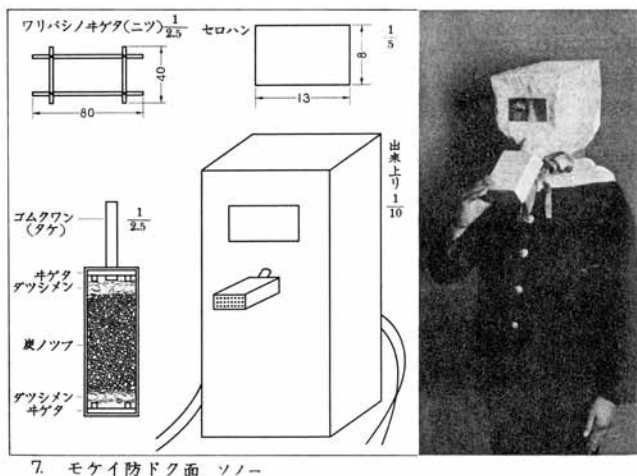
ついに「簡易応急防毒面」は「モケイ防ドク面」として、国民学校初等科の教科書に採用される。Hはその『男子用』に載せられた図面と模型防毒面を着用した男子学生の写真。

生徒が手にする『男子用』と『女子用』には展開図と写真のみで、教師の指導要領である『教師用』に詳しく作り方が解説されている。その冒頭「要旨」には、「障子紙または生半紙、厚紙、木炭等比較的多くの材料を総合的に用いて模型防毒面を作り、簡易な化学的装置の構成につき修練をなし、構成員、国防思想を涵養し、且つ防護訓練に資せしめる」とある。

単純そうに見える覆面部の作り方も中々難しい。「指導1」では、障子紙二枚を貼り合わせて紙の間には麻糸を貼りこむとか、目出し部分のセロファンは糊だけでは剥がれやすいので針で縫いつけるなどと、難易度の高い工作を要求している。素材が強度不足なのは仕方ないが、『教師用』の筆者は針孔から毒ガスが漏れ入るとは想像しなかったのだろうか。今回の展示用の試作にあたっては、障子紙二枚を張り合わせることは守り、他の工程は省略した。

「指導4」には、「指導上特に注意すべきことは、どこまでも自力で図を読み、構造や組立方法を理會させて製作せしめること」とある。教育上の力点を防毒マスクの構造理解に置いていることに注意されたい。

末尾の「備考3」で、吸収剤としてリン酸液に浸した堅炭を推奨しているのは野口啓助と同じ。なお、口にくわえる管は細くなっており、この時点で15mmに改良変更されている。太すぎてくわえ難かったのだろう。文部省が直接作成した教科書に、障子紙で作る防毒マスクが載せられている事実は、「戦争の悲惨さ」を伝えるには格好の資料であろう。



H.『初等科工作 二 男子用』より

⑨大日本防空協会 編『防空絵とき』昭和17年11月

防空対策普及のための全頁カラー絵解き本。応急吸収缶と鼻挟の製作用図面を載せる。

⑩『科学と模型』昭和18年6月号

今井正「模型防毒面の作り方」

大阪の老舗模型店である朝日屋が出版していた雑誌。大阪市塩草国民学校(現 大阪市立塩草立葉小学校)の今井正校長が「モケイ防ドク面」を詳しく解説しているが、内容は⑧『初等科工作 二 教師用』の丸々剽窃である。この今井校長を模型防毒面の考案者だと推定する向きもあるが、前述のように山田櫻であり誤りである。

⑪毎日新聞社 編『図解 防空指導室』昭和19年2月

簡易吸収缶と鼻挟みを載せている。

⑫大日本防空協会帝都支部編『隣組防空絵解』昭和19年6月

編者は前掲⑨と同じく大日本防空協会。⑨を編集し直したものか。⑨では応急吸収缶と呼ばれていた簡易吸収缶と鼻挟を載せる。

⑬『主婦之友』昭和19年12月号

「瓦斯空襲と家庭防護」

代用吸収缶を載せる。吸収剤は「小豆粒大の粉炭か玄米を焙烙でよく炒って黒焼にしたもの」で作るとある。

以上、昭和11年から19年までの、手作りによる対毒ガス用具を載せた文献を見てきた。一連の経過から模型防毒面は防衛司令部の主導で始まり、山田櫻がアイデアを提供、野口啓助が実際に試作し、それを宣伝普及した構図が浮かび上がってくる。化学兵器や軍用活性炭の権威である山田櫻は看板を貸しただけで、実質的考案者は野口啓助である可能性も否定できない。しかし、関係者であるのは間違いあるまい。防毒面の自作はガスマスクの構造と国防政策の理解につながる教育的効果を狙った側面があり、防空法普及と当初から連動したものである。昭和12年10月に防空法が施行されるが、その前月に野口啓助の著述が集中していることが、それを如実に示している。なお、内務省と大日本防空協会が携わった刊行物は、専ら応急吸収缶と鼻挟を載せ、模型防毒面は無視する傾向があったようだ。

今日、戦前から敵国の焼夷弾攻撃を予測しておきながら、有効な対策を打ち出せなかった防空政策が問題視されている。しかし、軍部の予想が外れてしまった敵国の毒ガス攻撃は、幸い本土ではなかったため、意外なほど軽視されている。焼夷弾を濡れたムシロや砂、あるいは火叩きで消せるとした防空対策は、今日からすると余りに無謀でお粗末なものだが、同様の見通しの甘さがこれら手作り防毒用具に感じられる。毒ガス攻撃がもしあったとすれば、焼夷弾と同様、あらかじめ予測していたにもかかわらず、被害は甚大なものとなっていたであろう。

企画展示「戦後70年～私たちのまちは戦場だった～」の開催

東大和市立郷土博物館 浜田恵美

1. はじめに

当市には、昭和13年に軍需工場の一施設として建設され、空襲を受けた傷跡を残したまま平成5年まで稼働を続けた「旧日立航空機株式会社変電所」があります。当時の悲惨さを伝える貴重な「戦災建造物」として市民運動が行われた結果、平成7年に市の指定文化財として都立東大和南公園内に保存されることになりました。

戦後70年にあたる平成27年は、この軍需工場であった変電所を中心とした内容での企画展示を行いました。また、下記のような関連イベントを実施しました。

- ・企画展示「戦後70年～私たちのまちは戦場だった～」の開催（7月11日～9月6日）
 - ・企画展示関連講演会「日本の戦争遺跡の調査・研究と保存～旧日立航空機変電所を中心として～」の開催（8月9日）
 - ・旧日立航空機立川工場変電所の連日公開（8月11日～8月23日）
 - ・東大和まちなか歴史めぐり「軍需工場と米軍大和基地の痕跡をたどる」の開催（9月27日）
 - ・プラネタリウム番組「戦場に輝くベガ」の投影（8月の土日のみ）
- この中から、今回は主に企画展示について報告します。

2. 企画展示の内容

企画展示は6つのテーマに分け、展示を行いました。そのテーマごとに内容をまとめていきます。

(1) 「軍需工場がやってくる」

博物館では、変電所内部にあった備品や機器類のうち移動可能なものを博物館に運び込み、保存しています。これらの中から、今回の展示では、戦前から使用されていた水銀整流器などの機器や備品類などを展示しました。保存している資料のごく一部ではありましたが、展示室での展示は初めてになります。



展示の様子1

これらは、いつから使用されていたものかがはっきりしないものも多く、また、詳細なリスト化もされていない状態のままとなっています。いずれは変電所を常時公開し、当時の状況展示をしたいという構想があるのですが、変電所自体が不特定多数の見学を受け入れるには強度が不足しており、用途は立っていない状態です。

また、今回の企画展示では、変電所が最後に稼働していた当時の会社のOB会にご協力をいただくことができました。そのOB会に戦前から引き継がれてきた、戦時中に工場で作っていたエンジンの写真、機器類の青焼き図面など、貴重な資料を展示しました。

(2) 「ぜいたくは敵だ!」(つましい村人のくらし)

当時の社宅や教練の際の写真、博物館に寄贈されている戦時中の生活についての資料の中から、国民服や灯火管制用のカサ、配給券、ガスマスクなどを展示しました。また、当時の貨幣の混乱の様子を示す資料として、大正末期から昭和23年までの50銭から1銭までの貨幣を年代順に並べ、貨幣の素材や大きさが大きく変わっていく様子を展示しました。



展示の様子2

(3) 空襲がはじまる(工場の被害と犠牲)

このコーナーは、工場の空襲被害の様子の写真、市内に落とされた爆弾の破片・銃弾、空襲を受けた天井板、不発弾処理の様子や多摩湖湖底から見つかった爆弾跡の写真等、工場及び市内の空襲被害についての資料を展示しています。

子どもにも分かりやすいよう、250キロ爆弾の実際のサイズ模型を天井から吊るしました。これは職員が発泡スチロールをけずって色を塗って作ったものですが、やはりインパクトは大きいようで、こんな大きなものが落ちてきたら、と話す親子連れが多くいました。

これらの展示の中でも、「空襲日誌」は、立川市にあった立

川飛行機検査課に勤務していた方が、空襲の様子を警報の発令と解除を交えて克明に記録していたものです。東大和の工場で大きな被害があった空襲の日の記述部分を取り上げて展示しました。2月17日の記述を例に取ってみると、午前7時35分以降、数回の空襲警報の後に午前10時35分より空襲、午前10時57分警報解除、その後も数回の警報発令があったことがわかり、当時の様子を物語る貴重な資料といえます。

また、工場の様子として、空襲後に撮影された工場内の写真が残されています。これまで工場内の施設配置は、これらの写真や工場完成予定図面からおおよその位置を把握していました。今回の展示にあわせて終戦直後の航空写真を最大限引き伸ばしたプリントを国土地理院から購入したことで、航空写真と現在の地図とを重ねあわせることができるようになりました。

そこで、9月27日開催の「東大和まちなか歴史めぐり」にはこの内容を反映させ、写真と地図を対比させながら、まち歩きを行いました。より具体的な工場の大きさが参加者にも認識できたのではないかと思います。



東大和まちなか歴史めぐり (変電所内部の見学)

(4) 戦後の米軍大和基地の設置とその顛末

戦後、工場の南部分は米軍大和基地として接收されました。昭和48年に返還されたものの、その跡地利用については大きな市民運動が起こり、昭和56年まで国や都と交渉を行うこととなります。当時は市報でも随時号外を出して詳細な経過報告等を行いましたので、それらの市報や写真などを展示しました。

(5) 私と戦争

企画展示開催にあたり、市民へ資料提供や協力を呼びかけました。その結果、立川飛行機の食堂に勤務していた際に使用された食器類、戦地から送られた妻への手紙約70通、出征に際しての日章旗の寄せ書き、戦地での体験をまとめた手記など、博物館にある資料とはまた違った様々な内容の貴重な資料を、6名の方から借用して展示することができました。

(6) 多摩地域と全国の戦争遺跡

これまでも毎年8月に「多摩の戦跡写真パネル展」として、

現在も残る戦跡を中心に、職員が撮りためてきた写真をロビーで展示してきました。今回はさらに日本全国の有名な戦争遺跡の写真を追加し、企画展示の中に組み込みました。また、今年は戦争関連の報道も多かったため、展示期間中に該当するような新聞記事や情報があれば追加するよう心がけました。さらに、来場者からも情報をいただくこともあり、来年以降に向けて、情報の更新を図りたいと考えています。

3. 講演会

8月9日に開催された講演会では、変電所の保存のために問題を抱えていることや、戦争遺跡についての展示を行っていることから、戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表の十菱駿武氏に依頼し、展示関連講演会を開催しました。本来は展示会場と同じく博物館で開催を予定していましたが、適当な大きさの会場がないため公民館ホールを借りて開催することとしました。

いくつかの代表的な戦争遺跡についての保存状況や文化財指定の現状や問題点、これからの保存に向けての必要な取り組みについて、ご講演をいただきました。

4. まとめに代えて

今回の企画展示は、最終的には3,798人の来場者数となりました。その集計を見ると、市外からの来場者が半数を占め、近隣市町村のほか、大阪や仙台など遠くからの来場があったことに驚いています。プラネタリウムでも、戦争に関連する番組として「戦場に輝くベガ」を期間限定で投影したため、来場者数については相乗効果で増えたのかもしれない。

当市の戦争資料を可能な限り網羅するつもりで、展示を行ったことから、多少雑多な展示となりましたが、展示室いっぱい資料が展示され、見学者からも、見ごたえがあったという声をいただきました。反面、展示内容の分けがはっきりしておらず、分かりにくい部分があったかとも思われます。

今後はもっと戦争を知らない世代が増えてくることから、そのような世代に伝わるような展示はどのようにしたらよいか、今後の課題としていきたいと思えます。



展示解説の様子

特別展戦後70年 昭和の戦争と八王子

八王子市郷土資料館 美甘由紀子

■はじめに

八王子市は、終戦近くの昭和20年（1945）8月2日未明、B29により約2時間にわたって大きな空襲を受けた。JR八王子駅周辺と甲州街道沿いの旧市街地は80パーセントが焼け野原となり、後に八王子市に合併した横山村や浅川町など周辺町村でも多くの場所が被害を受けた。この空襲では約450名もの貴重な命が失われ、1万4300戸以上の家屋が焼失している。八王子市郷土資料館では、八王子空襲の惨禍を後世に伝える為、継続して様々な事業を行ってきた（下図参照）。

年(和暦・西暦)	内容(開催日時)
昭和50年(1975)	八王子空襲展(8月1日～9月14日)
昭和60年(1985)	『八王子の戦災と空襲の記録』総説編 市民の記録編 資料編 発行 ※昭和56年から編集室を設置 八王子空襲展(7月30日～9月1日)
平成7年(1995年)	特別展「戦争と人々の暮らし」(7月30日～9月3日) 図録『戦争と人々の暮らし』発行 記念講演会「戦争と市民の暮らし」「八王子軍需工場と人々の暮らし」
平成17年(2005年)	特別展「戦時下の八王子」(8月2日～9月4日) ブックレット『八王子空襲』発行 記念講演会「戦争と八王子」講座「戦時中の食生活」
平成27年(2015年)	特別展「戦後70年 昭和の戦争と八王子」(7月22日～9月30日) 図録『戦後70年 昭和の戦争と八王子』発行

これらは、終戦から10年ごとの節目にあたる年に開催した事業であるが、近年では、毎年夏に「子どもと戦争」、「国民精神総動員運動」、「出征」、「戦時下の生活」などのテーマでコーナー展を開催している。その他、千人針や防空頭巾などを実際に手にとって見る事が出来る期間を設けたり、空襲や戦争を体験した方から体験談を聞く講座を行なっている。また、戦争や戦時下の生活に関する資料は積極的に収集している。

■特別展「戦後70年 昭和の戦争と八王子」の開催趣旨

終戦から70年を経た現在、戦争を体験していない世代が大多数を占めるようになった。終戦時に国民学校に在籍していた人は70代の後半に、中学生であった人は80代の前半もしくは後半になっており、戦地に出征した人から話を聞くことは大変難しくなっている。戦後40年にあたる昭和60年に発行した『八王子の空襲と戦災の記録』の一連の書籍に掲載されている体験談は、すでに聞くことができない話が大半を占めている。

このような時代に戦争の記憶を伝えていくためには、郷土資料館で収蔵している戦時中の物や写真が更に重要となっていくのではないかと。例えば、「終戦近くには、軍馬の餌にするために茶殻も回収しました」という説明を聞いたり読んだりすると「茶殻の回収を強力に実施致しますから振るって供出願います」と強い文言で書かれた回覧板を実際に見るとでは、感じ方が違うであろう。戦後70年の節目の年に、市内に残る戦時下の資料をしっかりと見つめることで、戦時下の人々がどのような生活を強いられていたのかを知り、戦争の悲惨さとともに

平和の大切さを感じて欲しいというのが展示の目的であった。

■収蔵資料の再整理

特別展の開催あたり、郷土資料館で収蔵している戦争関連の資料の再整理を行うこととした。

本館の戦争関連の収蔵資料は、「空襲関係収蔵資料目録」にまとめられている。これは、昭和56年から始まった『八王子の空襲と戦災の記録』の編纂作業の際、開館以来の収蔵資料と編纂過程で収蔵した資料を空襲・防空・教育・市民生活に分類した目録で、戦争に係る収蔵資料を幅広く市民に利用してもらうことを目的に作成されたものである。

前述したが、目録の作成以降も、戦争や戦時下の生活に係る資料を積極的に収集してきた。資料寄贈の申し出は毎年数回あり、特別展を開催した年には、戦地に行った父の遺品を処分しようと思っていたが資料館で役立ててもらいたい、展示を見て自分の家にも展示資料と同じような物があるので寄贈したいなどの申し出が例年より多くある。本館では、八王子市内の資料のみ受け入れているが、「空襲関係収蔵資料目録」を作成以降に受け入れた資料は、軍服や千人針、代用品などの「物」だけでもかなりの分量となった。そこで、可能な限り「物」資料の写真を撮影し、写真データ化すること、カードが作成されていない資料はカードを作成し、注記を確認するという整理作業を合わせて行った。

この作業は、図録の作成に生かすことができたが、かなり大変な作業となった。一例を挙げると、70点以上収蔵している凱旋・除隊の記念盃は、全て写真をとり図柄と形態を確認し、「除隊・凱旋記念の盃」として一括で収蔵していたものを日露戦争・上海事変・日中戦争と時代によって分類をした。また、軍服は裏地についている所有者の名前と製造年代、型式をすべて一覧にし、夏服、冬服などの種類ごとに分類した。この作業を行なっている過程で、数年にわたり、数回にわけて寄贈を受けたため、別々の収蔵場所においてあった軍靴や外套、毛皮つきの帽子などの資料が、北支（中国の華北地方）に派遣され抑留後に帰還を果たした兵士の一括の装備であったこともわかった。

整理作業後は、「軍服」・「千人針」・「出征関係の資料」（出征職や出征軍人の襷など）、「燈火管制の関係資料」（燈火管制の電球や電球の笠）、防空関係資料（鉄兜や防空頭巾、救急箱など）、「代用品」などの種類ごとに収蔵した。

資料を寄贈者別ではなく、種類ごとに収蔵したのは、市民に幅広く利用してもらうためである。毎年、夏の時期には市民団体などが戦争や戦時下の生活を紹介する展示を行なっている。郷土資料館でも相談を受けたり、資料や写真パネルを借用したいとの依頼がある。資料を種類ごとに収蔵することで、資料の全体を把握することができ、例えば出征関係の資料であればどの資料を貸し出すことが出来るかなどの確認が容易と

なり、市民からの閲覧や借用の依頼に確実に対応することができるようになった。

■図録の作成

特別展の図録は、展示内容を解説する図録ではなく、資料集として後々まで使用、活用できる図録を作成することとした。本館で昭和60年・平成7年・平成17年に開催した戦争関連の一連の特別展では、展示図録を刊行しておらず、展示図録の代りとして『八王子の戦災と空襲の記録』三分冊(昭和60年)、平成7年は『戦争と人々の暮らし』(平成7年)、ブックレット『八王子空襲』(平成17年)を刊行している。

『戦争と人々の暮らし』は、展示の参考・資料集として刊行したもので、昭和6年(1931)からの八王子の戦時下年表と文書類・写真で構成し、本館で収蔵している回覧板の綴りの中から「東京都隣組回報」34号分の表と裏を掲載している。この図録の特徴は、文書類を実際に読むことができるように大きく掲載したことである。展示を担当した土井義夫学芸員は、展示が終了後も活用することができる資料集を作成するという方針であった。

今回の特別展の図録『戦後七十年 昭和の戦争と八王子』は、展示の内容に沿って「満州事変と八王子」「拡大する戦線～日中戦争へ～」「国家総動員体制」「八王子空襲」「焼け跡からの出発」の五章構成とし、章ごとに概略の説明をつけ、軍事郵便や新聞記事、チラシ、通知類、回覧板などの文書資料は全て文字が読めるように大きく掲載した。掲載資料には、適宜、簡潔な説明をつけた。

例えば、「隣組」を扱った箇所では、隣組の成立と活動についての説明をし、その活動の詳細を伝える資料として「常会の誓」(昭和17年か)、「市常会協議懇談事項」(昭和18年1月)、「六月の市常会協議徹底懇談事項」(昭和20年5月)を掲載した。文章中の言葉使いや言い回し、市民に呼びかける言葉などは、当時の状況を最も具体的に伝えており、戦時下の資料としても利用することができる。二年分の常会の協議懇談事項を掲載したのは、昭和十八年から昭和二十年の約二年間で隣組の活動がどのように変わってきたのかを実際に中身を読んで、比較してもらうためである。題名を比較しても昭和二十年のものには、「徹底」と言う言葉が入り、文章中の文末表現も「しませう」(しましよう)から「しやう」と強くなっている。図録を手にした人が読むことができるように資料を掲載することで、資料を最大限に生かすことができるのではないかと考えた。特に文章量が多く、展示には向かない資料を掲載した。

また、『戦争と人々の暮らし』は文書資料の掲載が中心であったこと、文書資料ばかりの図録になると読みにくさを感じる方もいるだろうことを考え、今回の特別展の図録には、軍服や軍隊での携行品、消防ポンプや防毒マスク、焼夷弾の尾翼や高射砲の信管など「物」資料の写真も多く掲載することにした。図録に掲載した資料のうち、特別展で展示したものは三分の二程度である。図録の総ページ数131頁、掲載資料の写真は378枚となり、郷土資料館の特別展としては例年よりボリュームのある図録となった。

■展示期間

展示の会期は、7月22日(水)から9月30日(水)までの約2ヶ月間である。9月中を会期としたのは、学校の団体見学に対応するためである。例年、団体見学では小学校三年生が社会科の時間内に昔の道具調べで当館を利用している。9月中には、特別展見学を目的に普段は本館を利用する機会が少ない小学校6年生や中学生の団体利用が9件あった。子どもたちに戦争と平和を考える機会を提供できたこと、学校教育との連携という面でも大変良かったと思う。

■展示内容

本館の特別展、企画展は例年、入口近くの特別展示室(59㎡)で行なっている。今回の特別展は、戦後70年の節目の年に行なう展示ということもあり、規模を拡大して1階の常設展示場を全て使用した。使用した展示ケースは、壁にくくりつけの大ケースが10ケース、のぞきケースが17ケース、入口のエントランスコーナーである。



エントランスコーナー 石崎星志氏撮影



展示室入口 日章旗・出征幟などの展示 石崎星志氏撮影

展示は「満州事変」から始め、八王子市が自転車競技の会場となった昭和39年(1964)の東京オリンピックまでをとりあげた。戦時下の生活と八王子空襲を展示の中心とし、空襲の惨禍から市民が力を合わせ生活再建への努力を重ね、終戦か

ら19年後の昭和39年に行われた東京オリンピックでは、自転車競技会場として各国の選手団と観戦者を迎えるまでになった復興の軌跡も取りあげた。戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えるとともに、復興への軌跡も合わせて展示することで、現在の八王子の姿の影には、復興へ尽くした人々の努力があったことを示した。

大ケースのテーマは次の通りである。

- 1 「満州事変と八王子」
- 2 「拡大する戦局～日中戦争へ～」
- 3 「身近な人々の出征」
- 4・5 「国家総動員体制」
- 6 「戦争と子どもたち」
- 7 「工場の疎開～浅川地下壕」
- 8 「八王子空襲」
- 9 「焼け跡からの出発」
- 10 「オリンピックへ向かって」

新しい試みとして、展示室の一角に戦時下の部屋の様子を再現し、来館者が中に上がれるようにした。焼夷弾が落下して燃え上がった跡のある板戸を組み立て、畳三畳を敷き、ちゃぶ台や筆筒、真空管ラジオ、子ども用の絵本の複製（『ミクニノコども』をカラーコピーして閉じたもの）などを置き、燈火管制用のカバーをかけた電球を吊るした。このコーナーは、評判が良く、特別展終了後も常設展示として活用されている。



戦時下の部屋の再現 石崎星志氏撮影



「身近な人々の出征」 石崎星志氏撮影

また、例年のコーナー展では展示できない大型の出征幟を三本、二階から吊るした。頭を悩ませたのは、開館以来常設展示室に置かれている八王子市の大型地形模型ジオラマである。ランプを押すと該当箇所が点滅するので団体見学の子ども達からは人気であるが、移動が難しくどのように展示の中に組み込むかが問題になった。結局、地形模型の上から米軍機B29の模型を吊るし、模型の中に八王子空襲での焼夷弾の第一落下地点にあたる中山製麦所・P51戦闘機により列車が襲撃され多くの被害者が出た湯の花トンネル・八王子駅・高尾駅の標識を入れ、模型の周りのガラスにB29の性能と焼夷弾の構造を示したパネルを掲示して、八王子空襲の全体を把握する展示品とした。展示資料総数は、約500点となり、写真などの数点を除き大半が郷土資料館の所蔵資料である。

■展示作業

7月16日から全館休館して郷土資料館の職員がほぼ総出で展示作業にあたった。人手を必要とすることが予想されたので、ガイドボランティアの皆さんにも片付けや掃除などのお手伝いをお願いし、当日は、有志の方々に多くのご協力をいただいた。展示資料の運び出しと搬入、ケース内とガラス、床の掃除などには、人手が必要となったので、普段から資料館の活動を良く理解しているボランティアの方々の協力は、大変に助かった。焼夷弾の焼け跡のある板戸の取り付けでは、一級建築士の方が全て取り仕切ってください、見事に組み立てられた。今後、郷土資料館の運営を考えていく上で、市民の協力は欠かせないことを今回の展示作業を通して痛感した。

■アンケート結果

会期中の入館者は5649名で、一日平均の入館者数は94名となった。アンケートを実施し202枚を回収した。展示の内容では、約95%の方が「良かった」と回答し、良い評価を得ることができた。展示の量は、「多い」と「少ない」がそれぞれ約1割で、「ちょうどよい」が約8割(77.8%)であった。例年の特別展や企画展では、特別展示室を会場としている為か、アンケートの結果で「展示品の量が少ない」という声が多いのに対し、今回は会場も大きく「特別展」として来館者の方々に満足していただけたと思う。

来館者の傾向は、市内在住の方が68%、多摩地域が18%、23区内が4.5%、他府県が9.4%で、市内在住者が約7割を占めているが多摩地域の方の関心も高かったことが窺える。

年齢層では、最も多いのが50歳代から60歳代で約33%、次いで戦争体験世代の70歳代以上が28%となっている。また、20歳代から40歳代は16%(32人)で、これは例年の特別展のアンケート結果と比較すると、割合としては多い方である。全体で見ると、戦後生まれの来館者が7割以上を占めていて「戦後70年」という節目の年にもあたり、戦争を体験していない世代の関心が高かったことが窺える。

来館回数は、「はじめて」という答えが3割あり、今回の特別展を目的に初めて来館された方が多かったことが窺える。「6回以上」という来館者も約3割で、郷土資料館の「常連さん」と初めて来た人の割合がほぼ同じとなった。

自由記述欄では、「戦中の市民生活が垣間見られた」、「子ども達に是非見て欲しい、(中略)戦争の実相が片鱗だと思いますが分かりました。」「親に聞いていて知識として入っているものが資料と結びついたりしました」、「市民の目線で展示されていて当時の八王子市民が戦争遂行に協力していった様子が窥えます。当時のナマの生活がよく見えるようです。後世の市民の為にも大切に保存していただきたいものです」など、良い展示であったという声が多かった。

■おわりに

「戦後70年 昭和の戦争と八王子」を終えて、戦時下の資料を通して、さまざまな世代に戦時下の生活、戦争の悲惨さ、平和の大切さ、平和を願う気持ちを来館者に伝えることができたと思う。しかし、展示だけでは戦争の悲惨さ、とりわけ空襲の悲劇を伝えることは難しいと感じたのも事実である。



「八王子空襲」 石崎星志氏撮影



「焼け跡からの復興」 石崎星志氏撮影

八王子空襲の資料は、空襲から二か月後に撮影した市街地の焼け跡の大型写真、焼夷弾の尾翼、空襲で溶けたガラスや金属の塊、爆弾の破片、焼け焦げた釜、溶けた硬貨などがあるが、これらの資料で450人もの命を奪った空襲の悲劇を伝えられるか、やはり、「空襲を体験した人の語り」が必要になるのではないかと。本館では、八王子が空襲を受けた8月2日の前後2日間、もしくは終戦記念日の前後2日間に「講座 八王子空襲」を開催し、ガイドボランティアの有志が作成した紙芝居「八王子空襲」の上演、「ガイドボランティアによる戦争体験を語る会」、八王子空襲の体験者の方から話を聞く「八王子空襲

の体験を聞く」を行い、千人針や鉄兜などの資料に触れることができるコーナーを設けている。体験談を聞く会には、年々参加者が増えており、特に親子連れの参加者が多くなっている。本年講演をお願いした女性は、今まで家族にも話したことのない空襲下での体験談を語ってくださり、そのお話は、展示では伝えきれない重みがあった。アンケートにも体験談をもっと聞きたいという声があり、展示とともに、体験談を後世に伝え、残していくことが必要であると実感した。

本年は、「戦後70年」という節目の年にあたり、マスコミも大々的に報道したため、「戦争」、「戦争の記憶」が改めて注目された年であった。私は民俗を担当しており、市内のお年寄りからいろいろなお話を聞く機会がある。多くのマスコミが「戦争の記憶」を伝えるのを見て、「今、戦争の記憶を話しておかないと、次の世代に伝えることができなくなってしまう」と考えるようになった方にもお会いした。「今なら話せるよ」とおっしゃった方もいた。今まで自分の体験なんて話す必要もないと思っていた方も、「伝えておかなければならない」という意識を持ち、そして、戦後70年の年に「戦争の記憶を聞いておかなければならない」と思った人も多いだろう。

終戦記念日を過ぎると「戦争」に関する報道は徐々に少なくなった。「戦後70年」をブームのように終わらせず、市民の間で生まれた関心を引き継いでいかなければならないと思う。先にも述べたが、出征した人から体験談を聞くことはすでに難しくなっている。戦後50年にあたり刊行した『八王子の空襲と戦災の記録』に掲載されている体験談の多くは、現在では聞くことのできない貴重な記録になった。「戦後70年」は、戦争を体験した世代から体験談を聞くことができる最後の機会だと思う。これからは戦争に関係する資料を収集するとともに、資料館で所蔵している戦争や空襲に関する物や回覧板、チラシなどの文書、写真などの収蔵資料を戦争を体験した方々に見てもらい、体験に基づいた情報を得ることがますます必要となってくる。資料と体験談の双方から戦争の悲惨さ、平和の大切さを伝えていくことが郷土資料館の役割であると考えている。

紙芝居で「八王子空襲」を語りつぐ

八王子市郷土資料館 ガイドボランティア紙芝居会 池田ヨネ

郷土資料館ガイドボランティアの傍ら有志で「八王子かるた」紙芝居を作成し、かるた会や紙芝居の上演会を数多く行なっています。

最初は11年前になりますが八王子かるたを制作しました。八王子の歴史を48枚の絵札と読み札にまとめた八王子かるたは、勉強になると好評でした。

私たちもいろいろ調べながらの作成は自分たちの知識も深まりました。

「八王子かるた」が完成し一段落して、いつものメンバーで昼休みに、何気なく“何か次の事をやろうか”と、雑談の中で話が進み、紙芝居を作成することにしました。紙芝居は歴史などを分かりやすく伝えるためのツールとして最適と考えたからです。

また、IT世代の子供たちへ紙芝居の魅力を伝える事も一つの狙いです。紙芝居は私たちにとっては古くて懐かしい物ですが、今の子どもたちには目新しく新鮮に映るものと考えました。題材は資料館らしさを念頭におきながら、八王子の歴史を後世に伝えられるものとして考えました。まず始めは、優しいイメージの「松姫さま」を主人公にすることに決まり童話作家の故菊地正先生の「松姫ものがたり」を使わせていただき、同じ題名で作成を開始しました。

平成18年(2006)、当初メンバーは9名でスタート。絵は八王子かるたを描いて下さったメンバーの一人にお願いしました。菊地先生の120ページの童話を12枚の紙芝居の台本にする作業は難しく、校正の連続でした。それは1枚の場面が長い文章になったり、その1枚の中にいくつものストーリーを展開したりし、絵を担当した方の頭をかなり悩ませました。しかし、素晴らしい絵が完成しました。

この年、8月には夏休み企画とし、郷土資料館集客室で紙芝居「松姫ものがたり」は本格デビューを果たし、11月、市内の老人会で初の出前を行いました。

紙芝居「松姫ものがたり」は世間に大きく告知され「出前」の依頼も多くなりました。郷土資料館から一步外に向かった活動の始まりとなりました。

2ヶ月後の4月から第2作として「八王子空襲」の制作に入りました。八王子市は人口56万強の都市となり、近代的なこの町八王子が空襲で焼け野原となり多くの悲劇に見舞われたことをご存知の方は少ないと思いました。私たちガイドボランティアの中でも戦争体験した人は高齢化しています。戦争を伝える最後の世代との思いもあって制作に踏み切りました。絵は今回もメンバーの同じ方に描いていただきました。シナリオは私たちが『八王子の空襲と戦災の記録』など、いろいろな資料を熟読し、時系列にストーリーを組み立てていきました。昨年1月に紙芝居会のメンバーの一人がお亡くなりになりました。その方は6年生の時、品川区から青梅の閑修院に学童疎開し、しばらくして疎開先から東京に帰って来てすぐに東京大空襲に遭いました。その体験から多数の提案をいただきシナリオに組み入れました。1年間の悪戦苦闘の中で生まれた手作りの紙芝居「八王子空襲」はボランティア定例会で皆さんに見ていただきました。しかし厳しいコメントを頂き不評でした。内容の分析、手直しに更に1年間費やし、制作期間2年を経て14枚の紙芝居「八王子空襲」は完成しました。

八王子空襲のストーリーは、さっちゃんという小学校4年生の女の子を主人公に昭和20年の八王子の空襲の悲劇を時系列に盛り込んだ内容となっています。「ランドセル地蔵」「八王子空襲」「湯の花トンネル列車銃撃事件」を中心に戦時下の生活を表現しました。60年後(今は70年)、焼け野原から見事に復興した八王子の市街地に立った年を重ねたさっちゃんが美しい八王子の夕焼けを見て空襲で燃え盛る炎を思い浮かべながら「戦争はしてはいけない」と心の中で呟く場面で終わっています。

本格的デビューは平成22年(2010)7月29日、郷土資料館



紙芝居『八王子空襲』ランドセル地蔵



紙芝居『八王子空襲』湯の花トンネル列車銃撃事件

の特別展「戦争と人々の暮らし」のイベントとして「戦争体験談と紙芝居実演会」を行いました。この企画で観客数40名と会場がいっぱいになるほど多くの方がいらして下さいました。

その後は、毎月「松姫ものがたり」「日光と千人同心」「八王子空襲」(「八王子空襲」は7月～9月)の紙芝居の実演会・紙芝居出前を行い好調に推移しています。若い世代の戦争を知らない人たちに八王子に起きた悲劇的な出来事などが伝わったと思っています。

そして今年、戦後70年の節目を迎えました。郷土資料館では特別展『戦後70年 昭和の戦争と八王子』を開催いたし、1階全体に八王子空襲や戦争関連資料を展示しました。昭和のイメージで展開した茶の間はご来館のお客様の眼を引きました。連日今までにない大勢のお客様がご来館されました。テレビなどでの強烈な戦後70年の報道は国民の皆さんに戦争への関心を高めていったと思います。お客様からは“よくこれだけの資料を集めましたね”とお褒めの言葉をいただきました。紙芝居会もこの特別展に参加させていただき、紙芝居「八王子空襲」を上演しました。8月14日(金)、15日(土)、22日(土)の3日間の上演でした。

ご観覧者数は3日間で102名 前年比170%と好調でした。紙芝居を昔見たことのあるお客様は“懐かしい”と言って笑顔を頂き、若い方には紙芝居は初めて見ましたと喜ばれました。14日に紙芝居の前段で行った体験談を聞く会では紙芝居会のメンバー4人で“戦時下の生活”をテーマに話を進めました。八王子在住で空襲を体験された2名、他の地方出身で空襲体験された方2名でした。真剣なまなざしで聞いて下さいました。八王子周辺が真っ赤に燃え盛るのをまじかに見た話、食べ物の話などでした。

参加者の皆様からいただいたご感想の一部をご紹介します。

- ・体験談では八王子の地元で戦時下に何が起きたのかが分かりやすかったです。
- ・何を食べていたか分かった。戦後生まれの私が現在平和に過ごせるのは皆様のお話を聞いて改めて実感しました。
- ・八王子に70年以上住んでいます。講師の方々と年齢が近いせいか親近感があり、その通りと懐かしく思いあれから70



紙芝居『八王子空襲』上演

年が過ぎたのかといろいろな思いを起こしました。

- ・直接このようなお話を聞く機会が有りませんので良い経験になりました。
- ・貴重な体験談をありがとうございます。お話された方も80歳近いと思います。年々体験者も少なくなる現在お元気でこれからも活躍いただきたいです。

15日に西山糸子講師(女性83歳)の体験談は皆さんに涙と感動を与えました。講師の細かいところまで具体的に話された内容は戦争の怖さを訴えました。

参加者の皆様からいただいたご感想の一部をご紹介します。

- ・今まで知らないできた八王子空襲の話をお聞きしたく参加しました。両親は戦争体験しています。叔父さんは兵隊に行き戦死しました。母は八王子空襲に遭い家が全焼し、「何もなくなくなっちゃんだよ」とよく言っていました。それ以上の話はしませんでした。今回きちんとお話をお聞きしておきたいと参加しました。お話の中から母の思いが伝わり涙が出ました。二度とこのような事のないように平和を願ってやみません。
- ・初めて聞く事ばかりでとても勉強になりました。戦争の記憶は風化させてはいけません。70年続いた戦争のない時代をいつまでも続くことを祈ります。
- ・戦時下を逃げて生き延びて行く心の強さと大変な苦勞を知り、今の平和な暮らしが続く様に願います。
- ・体験談を聞いて戦争とはこれ程恐ろしいものだったのかと感じました。

上記のように皆様からいろいろな思いを書いていただきました。

感想の中から平和への願いの大きさを改めて感じました。71日間という長期な特別展の中で“戦争はいけない事なのだ”ということは伝わったと信じます。

今、全国で高校生が平和の大切さを訴える活動をしている事が報道されています。頼もしく思いました。若い方たちに今後を託すとともに私たちもまだ頑張りたいと思います。



体験談『戦時下の生活』

伝承をどう扱うか—企画展「ムダ堀の謎をさぐる」に関連して

府中市郷土の森博物館 深澤靖幸

「ムダ堀」をご存じだろうか。大都市江戸の上水道である玉川上水の掘削に関しては失敗伝承がある。最初に府中、次いで福生で失敗し、羽村から取水してようやく成功した、というのである。そして、府中から立川段丘面に引水しようとして失敗した痕跡こそがムダ堀である。いや、そう伝承されてきたのがムダ堀なのだ。

ムダ堀は1970年代までわずかに痕跡を残していたが、宅地化の波に吞まれ埋もれてしまった。杉本苑子さんの小説『玉川兄弟』（1974年）にも、この失敗伝承は取り上げられているというのに、その存在はすでに忘れ去れていたに等しく、私も1996年の発掘調査で巨大な溝の姿を目のあたりにして、そういえばそんな伝承を耳にしたことがあると思い出したのだった。

発掘調査での再発見を機に、ムダ堀は府中市の発掘で明らかにすべき課題として調査担当者に強く意識され、その延長を探索する試みが続いている。私も、発掘調査成果を注視し、関連する史資料の探索に努め、2012年の時点で、その成果をいったん報告している（「ムダ堀に関する覚書」当館紀要25号）。伝承の真偽について明確な解答が得られたわけではないのだが、史資料を提示し、ムダ堀がいつ、どこからどこへ向かって掘られたのか、という基礎的な事柄の現状を整理し、そのうえで考えうる掘削の目的にも言及した。そして今年度、この内容をささやかながら展示の形で示すことができた。企画展「ムダ堀の謎をさぐる」（10/10～3/31）がそれである。

最初の発掘から20年近いので、けっして時宜を得た企画ではない。当然、市民の喰いつきがよい訳でもない。しかし、ムダ堀伝承は、96年の発掘の翌年、はやくも府中市立中学校の社会科副読本『郷土府中』に発掘写真とともに紹介され、それは今も続いている。このように教育の場にも取り上げられる〈伝承〉に対して、地域博物館としてその考証に必要な史資料を提示するのは責務といってよいはずだ。さらに、私見ではあっても、一定の見解を示すことも必要だと思う。それが先の報告であり、今回の展示なのである。

特に今回の展示では、このムダ堀の謎を、観覧者自らに考えてもらうことを意図して、展示構成した。伝承の真偽がはつき

りしないのだから当然ともいえるが、能動的に展示に参加してもらおう試みと位置付けてみた。もちろんその成否は、観覧者に委ねなければならないが、ふだん学芸員が経験している〈知る楽しみ〉を、少しでも体験して欲しい、という願望でもある。

ところで、近年、府中はさまざまな伝承に向き合ってきた。JR府中本町駅の東隣は徳川御殿の伝承地で、その発掘が行われている。ここでは三葉葵文の鬼瓦が出土し、伝承は実証された。ただ、この御殿の造営者を家康とする伝承については、豊臣秀吉造営説も提示され（馬場治子「府中御殿」当館紀要25号、竹井英文「豊臣政権と武蔵府中」当館紀要26号）、新たな議論を呼んでいる。発掘を機に、史料の見直しと探索、考証が改めて行われた成果といってよい。ちなみに、この発掘調査地は、古代武蔵国司の館跡も重複していて、国史跡「武蔵国府跡」として追加指定を受けている。

もうひとつ。都旧跡「浅野長政隠棲地の跡」についても新たな知見が得られている。長政はもともと秀吉に仕えた有力武将で、豊臣家五奉行の一人だが、秀吉死去の後は家康にも重用された。ところが、家康暗殺の嫌疑をかけられ、府中に隠棲したという。その伝承地の一画で発掘が行われ、居館を取り巻くであろう堀跡が姿を現したのである。もちろん、居館が埋もれていることは明らかになったとはいえ、発掘調査が限定的なため遺構の年代を特定できず、伝承にアプローチするには未だ材料が不足している。しかしそれでも、研究が大きく前進する希望は見えたと感じる。

あたりまえのことながら、地域にはさまざまな伝承がある。しかし、地域博物館として、学術的であれという思いが強ければ強いほど、これら伝承に対してある種のバリアをはって来た側面はないだろうか。根拠をろくに提示せずに批判してしまっていることもあると思う。反対に、無批判に受け入れてしまっている場合もある。もちろん、伝承が地域やそこに住む人々のアイデンティティに直結していることも少なくないから、批判がむづかしい場合もあるのだろう。さまざまなケースがあるとしても、伝承に関する史資料をきちんと提示し、その上で研究の現状を発言することは、地域博物館だからこそ取り組まなければならない課題だ、と強く思うのである。



1996年に発掘された「ムダ堀」

平成27年度の活動報告—ユニークな企画展—

町田市立博物館 村上智美

現在、町田市立博物館のパンフレットやホームページには、「館収蔵資料のほかに借用資料による展示など、ユニークな企画を心掛けています。」という文章が掲載されています。平成27年度は近代の量産ガラスや、町田市名誉市民作家などを展覧会のテーマに取り上げ、まさにユニークな企画を行った年でした。

3～5月に開催した「和ガラスのうつわ—近代日本のかわいいデザイナー—」展では、明治から昭和にかけての氷コップ（かき氷入れ）や、プレスガラス皿といった食器を紹介しました。西洋から流入した技術やデザインを取り入れ、日本人が生み出した、少し歪んだ、しかし愛嬌のある造形のガラスに会場からは「カワイイ！」の声が沢山あがりました。

7～8月に開催された「三橋国民 鎮魂70年目の夏」展では、町田市名誉市民・東京都名誉都民に顕彰された造形美術家三橋国民氏の彫刻、絵画、工芸などの多彩な作品を紹介しました。氏の創作活動の核心には、第2次世界大戦中のニューギニア戦線に出征の経験と、そこから生まれた生涯のテーマ「鎮魂」、「平和への祈念」があります。平成27年は戦後70周年にあたり、三橋芸術の軌跡を紹介するのに最もふさわしい夏となりました。本展の詳細は、特集記事に掲載されています。

続く9～10月には「沖縄の工芸—琉球ガラス・陶磁器・染織・

漆器—」展を開催しました。工芸の各分野を総合的に取り上げるとともに、琉球王朝時代から現代までの工芸に焦点を当てました。特に、戦後の琉球ガラスをまとめて紹介するのは沖縄県外では初めてのこととなりました。

10～11月に開催の「国立能楽堂コレクション—能・狂言の面と装束—」では、能楽の面と装束を種類ごとに紹介し、能楽を見たことが無い方にも親しみやすく展示をしました。能面が怖いものばかりでは無いなどの感想もいただき、能楽への理解が深まったと感じています。

1～3月は、「魅惑の小宇宙! 懐中時計」展を開催しています。

18～20世紀の欧米の懐中時計を中心に104点の懐中時計を展示しています。手のひらサイズに詰め込まれた、技術やムーブメントはまさに小宇宙です。館蔵品であるため、撮影をしていただけるようにしていることも好評をいただいています。マニアックですねというご意見をいただく事もあります。今後来館者の琴線に触れる展覧会を開催すべく、



ツボを探っていきたいと考えています。 「懐中時計」展チラシ

青梅・羽村子ども体験塾「発掘調査体験」

青梅市郷土博物館 鈴木章久

青梅市では、平成18年度から東京都市長会の助成を受けて「多摩・島しょ子ども体験塾」事業として小学生から高校生を対象に発掘調査体験を行っています。平成22年度からは羽村市と共同で行う形となり、毎年夏休みの時期に青梅市と羽村市の子供たちが協力して発掘調査体験を行っています。

本発掘調査体験事業は、青梅市内を流れる霞川流域の霞台遺跡内に位置する市営住宅跡地（青梅市野上町）において行っています。霞川の流れる周辺には、はるか昔より人々が暮らし始めた遺跡が数多く残されており、霞台遺跡はその中でも特に規模が大きい遺跡です。この遺跡では、弥生時代末から古墳時代にかけて大規模な集落が存在していた事が、過去の調査により明らかになっています。

平成27年度は過去の試掘調査で15号住居跡と名付けられて



発掘調査体験の様子



出土した台付甕

いた竪穴住居跡で体験事業を行いました。

事前に委託業者により表土の除去や、休憩用テントの設置が行われ、7月26日の事前説明会を経て、28日から発掘調査体験が始まりました。初日から31日の午前中までは、住居跡の掘り下げや、出土遺物・床・壁面の検出作業等を実施しました。参加した子どもたちは発掘のプロから指導を受け、体調に気をつけながら発掘調査を体験しました。

発掘はシャベル等で土を掘り、溜った土を置き場へ運ぶという地道な作業の繰り返しですが、子ども達は真夏の暑さにも負けず、協力しあいながら真剣に作業していました。また、作業中に土器などの遺物が出土すると歓声が上がり、モチベーションを高めて作業に臨む姿も見られました。

住居跡がほぼ掘り終った31日の午後から8月1日にかけては、住居跡の平面図や微細図の作成、測量調査等の体験を行いました。今までの作業とは打って変わり、頭を使う作業となりましたが、子ども達は指導を受けながら、図面の作成や、レベル測量等に取り組んでいました。

今後も発掘体験を通して子ども達にチームワークや、古代の人々の暮らし、ひいては地域の歴史を学んでもらえるよう、よりよい事業の開催に努めていきたいと思っています。

「ホームムービーの日 調布」 8ミリフィルム上映会

調布市郷土博物館 金井安子

1980年10月27日、第21回ユネスコ総会で「動的映像の保護及び保存に関する勧告」が採択され、映画をはじめとするあらゆる映像が人類の貴重な文化遺産であり、その保存は、各国が緊急かつ恒常的に取り組むべき大きな課題だとされ、採択日が「世界視聴覚遺産の日」となりました。また、毎年10月の第3土曜日を「ホームムービーの日」として、世界各地で個人が撮影したフィルムを持ち寄った上映会も行われています。

当館でも古い8ミリフィルムはありませんかと市民に呼びかけ、2014年と2015年の10月に「ホームムービーの日 調布」を開催しました。地域のこども会の活動、家族旅行、お寺の庭掃除などのフィルムが集まり、文京区の映像史料館から神代村金子（現在の調布市西つつじヶ丘）にあった別荘のお花見の様子（昭和5年）を撮った映像をお借りすることができました。

上映会の司会進行役を「世話人」と呼び、8ミリフィルムは音声無しも多いので、映像を見ながら参加者同士で気が付いたことや知っていることを発言するという和やかな雰囲気です。

映します。懐かしい人が写っていたり、思わぬ発見があったり、カタカタとフィルムが回る音を聴きながら時間が過ぎて行きます。今後、上映会を重ねることで映像資料をアーカイブ化し、地域の映像遺産を保存することができればと考えています。NPO法人映画保存協会のホームページをぜひご覧ください。
<http://filmPRES.org/project/hmd/>



奥多摩 水と緑のふれあい館 活動報告

奥多摩水と緑のふれあい館 天沼晋志

奥多摩水と緑のふれあい館は、平成10年11月に開館し奥多摩の歴史・民俗芸能、森と水のかかわり、小河内ダムの資料等を展示しております。新たに開館してから多くのお客様に来館いただき、平成27年7月11日に来館者400万人を達成することができ、同日400万人達成記念イベントを開催し、400万人目となられた方に賞状と記念品を贈呈いたしました。また、11月5日から2階レストランで「小河内ダムカレー」を新たなメニューとして販売したところ、マスコミで取り上げられるなど好評を博しており、このカレーを目的に来館されるお客様もおられました。

当館に隣接して奥多摩湖があることや、周辺を豊かな自然に囲まれ四季折々の変化を目の当たりに楽しめる場所であることから毎年多くの方にご来館いただいておりますが、近年来館者数が減少傾向にあります。東京都水道局、町観光協会等、様々な団体との共催事業をすることにより来館者の確保に努めてきました。また、これらの一環として奥多摩湖周辺の四季の自然や風物を紹介する写真コーナーを設け、来館された方が別の季節にも訪れたくなるような展示も行っています。

今後も自然の博物館も併せ持つ施設として奥多摩湖を訪れる多くの方々に楽しんでいただくよう、管理運営に心がけていきたいと考えております。



400万人達成記念イベント

27年度の当館の主な活動としては次のイベント等を実施しました。

- 4月18～19日・春のミニコンサート（2日間延べ4回公演）
内容：ソプラノ歌手の公演
- 6月1～7日・水道週間（7日間）東京水等配布（都水道局と共同）
- 7月 11日・来館者400万人達成記念イベント
- 8月8日・夏のフラダンスショー
- 8月1～31日・奥多摩湖と周辺写真展
- 9月13日・水源地郷土芸能フェスティバル
内容：小河内の郷土芸能（獅子舞2団体及び鹿島踊りの上演）
- 10月 1日・都民の日イベント（ビデオ上映等）
- 10月11日・ヘブンアーティスト公演（午前 午後の2回公演）
- 11月14～15日・秋のミニコンサート（2日間延べ4回公演）
内容：都民交響楽団の演奏
- 11月21日・写真コンクール入賞者表彰式
- 3月13日・川野車人形上演

※28年度についても春・秋のミニコンサートや郷土芸能の公開を予定しています。



秋のミニコンサート公演

平成27年度の活動報告

瑞穂町郷土資料館 けやき館 竹田 俊一

瑞穂町郷土資料館 けやき館は、瑞穂町駒形富士山の現在地への新築移転の形で、平成26年11月にリニューアルオープンしました。また、平成27年7月18日より開館時間が10時～21時に変更となり、夜間もお楽しみ頂けるようになりました。平成27年度には、主に次のような特別展・企画展やイベント等を開催しました。

■特別展・企画展

企画展「端午の節句展」(平成27年4月25日～5月6日)

季節に因んで、瑞穂町とその周辺の五月人形や端午の節句にまつわる風習を取り上げました。五月飾りに加え、音楽や薬玉、柏餅、菖蒲、蓬などを展示することで、みて・きいて・さわって楽しんで頂きました。



企画展「端午の節句展」の様子

「新収蔵展—瑞穂の伝統とくらし—」(平成27年9月1日～11月3日)

近年資料館へ寄贈・寄託して頂いた資料の中から、瑞穂町の伝統やくらしぶりを振り返りました。4つの章に分けて、建物や景観の移り変わり、村や町の移り変わり、伝統工芸や職人の道具、日常生活の一場面について、それぞれ紹介しました。



「新収蔵展—瑞穂の伝統とくらし—」ギャラリートークの様子

特別展「GO! GO! NIAGARA—大瀧詠一の世界—」(平成27年11月17日～平成28年1月24日)

瑞穂町を拠点に活動したアーティスト・故大瀧詠一氏を取り上げ、ジュークボックスやギター、譜面、ゴールドディスクといったゆかりの資料を展示し、その軌跡を辿りました。また、「写真で見る同時代の瑞穂—1973年—」・「大瀧詠一さんを語る会

展示コーナー」の両展示を併催しました。



特別展「GO! GO! NIAGARA—大瀧詠一の世界—」の様子

企画展「けやき館 雛祭り展」(平成28年2月21日～3月7日)

瑞穂町の社会教育施設、耕心館で恒例となっている「瑞穂のつるし飾り」の開催に合わせて、雛人形の展示を行いました。子どもの成長を願って贈られた雛人形、雛祭りの歴史をひも解きながら紹介しました。

■主なイベント等

温故知新の会

郷土の歴史や自然に関する講演会や子ども向けの体験教室などを定期的に開催しました。

炉辺夜話—囲炉裏端で聞く昔話—

常設展示室内に再現された民家の囲炉裏端にて地域の講師から昔話などを聞くイベントを定期的に開催しました。

親子折り紙教室

親子で楽しめる折り紙教室を定期的に開催しました。

イブニングトーク

10月から、夕方の時間帯での朗読会や落語会などを定期的に開催しました。

みずほはたおり探検隊

7～10月にかけて、町の伝統的な絹織物「村山大島紬^{つむぎ}」を題材にした機織り・染色の体験教室を開催しました。

ふるさとづくり推進事業 自然観察会

8～3月にかけて、生物調査の専門家と一緒に、町内の動植物を楽しく観察する会を開催しました。

けやき館 日本のうた 講話と合唱

文部省唱歌や童謡を始めとした懐かしい日本の歌曲を取り上げたイベントを9月に開催しました。

平成27年度 狭山丘陵市民大学 「狭山観音霊場めぐり」

東村山ふるさと歴史館、東大和市立郷土博物館、武蔵村山市立歴史民俗資料館の合同事業に、当館も今年度より参加し、12～3月にかけて、講演と霊場巡りを共催しました。

経済産業大臣指定伝統工芸品・村山大島紬 拵板製造の実演

12～1月にかけて、元拵板職人による経済産業大臣指定伝統工芸品村山大島紬の拵板製造の実演を行いました。

常設展示部分における展示内容のリニューアルについて

福生市郷土資料室 青海伸一

福生市は、多摩地域で多く見られる江戸時代以来の農村地帯から住宅地へと発展してきました。それでいて、近隣市と比べて特筆するほど特徴的な出来事や資料が残されていないような状況にあり、地形的にも多摩川左岸にありがちな河岸段丘ということで、地域の特色を展示に反映することが難しいという課題が以前より存在していました。

また、開館当初通史の展示を行っていた展示スペースをつぶして企画展示を行っていることから、郷土資料室を標榜しながら、歴史に関する常設の展示がほとんど行われていないと言う課題も抱えていました。

そのような中、平成27年4月に、常設展示コーナーで展示していた展示内容を大幅に見直し、これらの課題解決に向けた取り組みを行いました。

具体的には、常設展示コーナーのうち、市内の豆腐屋の道具を展示していたコーナーを、歴史展示のスペースに位置づけなおし、福生市内でかつて見られた養蚕業や製糸業、また製糸工場から転換した自転車産業を紹介する内容へ変更しました。また、民俗展示コーナーでも、電化以前の道具が中心だった展示内容から、電化製品の普及と生活の移り変わりも学べる内容へと大幅に変更しました。

また、前号で紹介した音声ガイドシステムも一部ではありますが常設展示部分に導入しました。

■歴史部門の展示

今回の展示替えでは福生の産業を柱にすえた展示構成とし、かつて盛んだった養蚕業と、東京都で初となる大規模製糸工場を取り上げました。この製糸工場は、のちに片倉製糸が経営し、戦時中には軍需工場となり、戦後は平和産業への転換を図り、片倉自転車として自転車の生産を昭和61年（1986）まで行っていました。

また、片倉自転車は福生の工場が国内唯一の工場で、昭和39年（1964）に行われた東京オリンピックの自転車競技で使われた競技用自転車（片倉シルク号）の生産も行っていました。

養蚕業や製糸業自体は近隣市でも見られる産業ですが、富岡製糸場の世界遺産登録があったことや、片倉自転車が2020



片倉シルク号

年の東京オリンピックにもつながる内容であることから、他市にはない福生ならではの特色を表現できる展示内容ではないかと考えたものです。

さらには、2020年に向け近い将来オリンピック関連展示を行うに当たり、片倉自転車の資料を実際に展示することで、まだまだ資料の少ない関連資料の掘り起こしにつなげたいということも考えました。

■民俗部門の展示

以前より、民俗展示コーナーでは展示資料を用いた小学生の「むかしの道具調べ」の支援を行っていました。しかし、学校で想定している昔は、お父さんお母さんやおじいちゃんおばあちゃんが子どもの頃であり、電化以前の道具ばかりが並ぶ展示内容と授業内容との間に大きな隔たりが存在していました。

お父さんお母さんが子どもの頃と言えば、もう平成に入っていることもあり、今回の展示替えでは電化製品が家庭で使われるようになってから、平成に入るくらいまでの時代の道具を紹介することとしました。



電化製品の展示風景

具体的には、冷蔵庫や扇風機、テレビをはじめ、ワープロやビデオデッキ、ファミコンなど、つい最近まで家庭で見られた道具などで、家庭で使う道具や生活スタイルの移り変わりなどを学べるよう意識しました。

今回展示した工業製品である現代の道具からは、地域性を引き出すことはできなくなってしまいます。しかし、いざ工業製品を並べてみたところ、それまで感覚でしか理解できなかった道具の機能の変化も見えるようになってきました。特に今回新たに展示した多くの道具の機能が、スマートフォンの出現によって、いっそう機能収斂が進んでいっていることなどもわかるようになってきました。

さらに、常設展示で平成の時代まで取り扱っている博物館は、全国的にもまだ少ないと認識していたこともあり、他館との差別化を図ると言う意味でも、今回一気に展示している時代を現代に近づけることにしました。

福生市郷土資料室では、展示室そのものを大幅に改変するようなリニューアル工事を行うことはできません。その分、日々常設展示のあり方に意識を向け、展示の仕方や見せ方の工夫を少しでも取り入れ、これからは福生の特色を伝えるとともに、話題性あふれる展示ができるよう努力していきます。

平成27年度の事業から

武蔵村山市立歴史民俗資料館 堀部由美子

1 栄村姉妹都市締結25周年企画展「栄村に行こう！」

平成2年（1990）11月3日、市制施行45周年記念事業として、長野県下水内郡栄村と“姉妹都市”を締結してから、25年の歳月が過ぎました。



企画展「栄村へ行こう！」冬の民具

そこで、この姉妹都市締結25周年を記念して、栄村の“自然”を、“生活”を感じていただき、その素晴らしさを再認識していただくとともに、“栄村に行ってみよう！”との気持ちになっていただくため、企画展「栄村に行こう！」を開催しました（会期：平成28年1月15日～3月31日）。

この展示では、栄村で冬に使用する「民具」を中心に、歴史と文化の拠点施設と



蛇行する千曲川と点在する集落

となる「歴史文化館」、善光寺街道を歩く「小滝古道巡り体験記」や水内地区の野々海池築堤工事を初めとする壮絶な「開田事業」を紹介しています。

2 武蔵村山市立歴史民俗資料館分館の開館準備

平成27年は“戦後70年”の節目の年であり、三博協と三多摩地域資料研究会合同で、「戦後70年を考える - 戦争体験を次の世代に伝えるために - 」と題した研修会が実施され、また、各地の資料館・博物館においても、多くの戦争関連の特別展・講演会等が開催されました。

戦争に関する記憶が風化していく状況にあって、戦争に関連する資料を保存していくこと、また、戦争体験を語り伝えていくため、新たな取り組みをスタートさせる年であったといえます。

本市域においても、立川陸軍飛行場を中心とする一大軍事拠点の一画として、かつて、東京陸軍少年飛行兵学校や所沢陸軍航空整備学校立川教育隊、村山陸軍病院などの軍事施設が存在していました。また、市内各地には多くの防空壕が現在も残されており、様々な形で戦争に関連する資料が残されています。

そこで、本市では、これらの戦争関連資料等を展示し、市内に軍事施設が存在したことを後世に伝えるとともに、戦争の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ場として、広く市民等に学習の場を提供するため、「武蔵村山市立歴史民俗資料館分館」を建設することとなりました。

平成27年度に、防衛庁よりの再編交付金を充当し、歴史民俗資料館分館の新築工事整備事業が実施されました。

現在、平成28年秋頃の開館に向けて、関連資料の調査や展示構成の立案等、開館に向けた準備作業を進めています。

あきる野市五日市郷土館最近の活動報告

あきる野市五日市郷土館 関根輝雄

1925年(大正14年)に五日市鉄道(通称、「五鉄」)が、拝島～五日市を区間として開業し、昨年で90年を迎えました。五日市郷土館では企画展として4月2日から12月20日まで、「五日市鉄道創業時を振り返って～開業90周年～」を開催しました。

現在、私たちが通勤・通学、買い物・行楽などの身近な移動手段として、利用しているJR五日市線が、開通した当時の様子を収蔵写真を中心に展示公開しました。この展示に合わせて「五日市鉄道からIR五日市線へ—2路線が廃止に—」(郷土あれこれ第27号)を発行しました。

8月29日には、五日市地域で例年行われる「ヨルイチ」に合わせて、旧市倉家住宅(市指定有形文化財)を利用して「市民解説員による楽しい昔話・語り」と「ピアノとフルートのミニコンサート」を行いました。

10月25日には、あきる野市民文化祭に合わせ、館の駐車場伊奈本町の人形山車(文化庁補助事業により修理)を公開しました。山車の上では、重松流祭囃子が威勢よく演じられました。この山車は、江戸時代から明治前期にかけて八王子を中心に盛んにつくられた単層唐破風一本柱後建ての人形山車です。例年、9月中旬に行われる正一位岩走神社の祭礼で公

開しています。

平成28年1月7日からは、「あきる野ゆかりの人」のパネル展示を行っています。展示では、五日市憲法草案の起草者である千葉卓三郎や日本で最初にナイチンゲール記章を授与された萩原タケなどを紹介しています。



人形山車公開の様子

羽村市郷土博物館開館30周年記念事業 特別展「玉川上水羽村堰～今に生きる先人の知恵と工夫～」

羽村市郷土博物館 枝野孝彦

羽村市郷土博物館は昭和60（1985）年に開館し、平成27（2015）年で30周年を迎えました。また、平成26年11月には、玉川上水の取水堰である羽村堰が公益社団法人土木学会から選奨土木遺産の認定を受けました。このことと合わせ、羽村市郷土博物館では記念事業として、特別展「玉川上水羽村堰～今に生きる先人の知恵と工夫～」を開催しました。

羽村堰は江戸時代に多摩川の水を玉川上水へ取り入れるために造られ、玉川上水の完成からおよそ360年が経った現在も、現役の水道施設として機能しています。長い歴史の中で堰を構成する各部の材質は変化してきましたが、堰周辺の多摩川の流路や堰の位置、基本的な構造はほとんど変化していません。そこには、羽村堰周辺の地形的特徴を理解し、巧みに活用した先人の知恵と工夫がまつまっています。

特別展では羽村堰の基本構造や、地理的環境、水番人を中心とした玉川上水及び羽村堰の管理の様子、筏流しや通船事業に係る資料や研究成果を展示しました。平成27年8月15日から平成27年12月23日までの開催期間中には、115日間の開館で16,121人の方々にご来場いただきました。

また、特別展関連事業として、「羽村堰の写真募集」、「羽村堰見学会」、「連続講座」を実施しました。特に「連続講座」

は展示期間中に全4回実施しました。玉川上水の通船の歴史や絵図・古文書から読みとることができる羽村堰の姿、川崎分水の歴史、羽村堰付近の地形と玉川上水の水路・水量、水番人の記録である『指田家文書』などのテーマについて、講師をお招きし、貴重な講演をいただきました。参加者は、全4回の合計で、のべ215名を数え、皆様から大変ご好評をいただきました。

今後も、多摩川とともに生きてきた羽村の歴史と文化を分かりやすく伝えていけるよう、各種事業へ取り組んでいきたいと考えています。

特別展のポスター



開館30周年活動報告

清瀬市郷土博物館 柳澤 剛

清瀬市郷土博物館は昭和60年11月に開館し、今年度30周年を迎えました。それを記念し、平成27年10月3日（土）から18日（日）まで西武池袋線開業100周年・開館30周年記念企画展「西武池袋線池袋～飯能間ぶらりスケッチ 南雲義男作品展」を開催しました。南雲義男氏のスケッチを紹介するとともにご本人を講師に迎えた風景スケッチ教室などを実施しました。

同企画展に先立ち、館内のテーマ展示コーナーでは、9月1日（火）から10月18日（日）まで南雲義男氏の作品と人となりを紹介する展示「南雲さんと野外スケッチ」を行いました。これは、記念企画展への機運の上昇を促すことを目的としました。結果、企画展は予想を上回る来場者があり、1,500人以上の方々にお楽しみいただけました。

また、テーマ展示コーナーでは開館当時を振り返る展示「郷土博物館の誕生アルバム」を平成27年10月29日（木）から平成28年3月まで実施しました。開館当時の企画展の様子や常設展示の様子、伝承事業の様子を紹介しました。当時を知る人も知らない人も足を止めて、開館時の様子を興味深げにご覧になっていました。

以上、本報告では開館30周年の節目に大きく関係した活動を報告しました。当館は今後も博物館活動の充実を目指し取り組んでまいります。

古い橋 (元加池駅周辺 2009年)
足跡のある茶畑 (小手振駅周辺 2013年)
燈台を歩く (清瀬駅周辺 2014年)

西武池袋線開業100周年・清瀬市郷土博物館開館30周年記念企画展

池袋～飯能間
ぶらりスケッチ
南雲義男作品展

平成27年10月3日（土）～18日（日）

入場無料 開館時間：9時～17時
10月5日（月）・13日（火）は休館

清瀬市郷土博物館
TEL 042-493-8585
〒204-0013 東京都清瀬市上清戸2-6-41

企画展のチラシ

平成27年度展示事業報告

立川市歴史民俗資料館 野口枝美子

平成27年度、立川市歴史民俗資料館では、企画展3回とミニ企画展6回を開催しました。その中から今回は、秋季企画展の報告をいたします。

平成27年10月24日(土)から12月6日(日)まで、企画展「中世の立川～武蔵武士・立川氏とその時代を探る～」を開催しました。中世に関する展示事業は、寄贈された立川文書を中心とした展示を平成13年および平成18年に開催していますが、平成22年に市教育委員会より発行した『中世武士立川氏関係史料集立川文書』の成果を踏まえた展示はしていませんでした。

そこで今回は、当該史料集の成果を踏まえた内容とともに、現在把握している市内に所在する中世の文化財を一堂に会し、改めて中世という時代、特に立川にとって最も重要な武士・立川氏にスポットをあてることにしました。

展示の軸は、立川氏に関する立川文書および系図と、鎌倉～戦国時代の立川の痕跡が残る寺社の2つに絞った内容にしました。しかし中世の立川の様相は未だ断片的にしかつかめておらず、南北朝時代から室町時代の立川については内容が薄くなってしまいました。そのため、立川という地域の



中での中世の諸相がとてつみづらく、一般向けの内容とは言い難かったことは否めません。しかし、期間中に開催したギャラリートークは、過去に開催したギャラリートークの中で最も多い人数が集まり、関心の高さが窺えた一幕でした。

また、関連イベントとして、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所との共同企画で、講演会「印刷本からわかること～文字から立川を探る～」を開催しました。共同企画である講演会を当館の企画展と関連づけることは今回が初めてでした。この講演会のテーマである中世に刊行された印刷本、とくに経典の文字から当時の世相を考察した内容は、普段公開していない文化財を題材としたこともあってか展示とともに関心が高かったようで、終了後には講師が質問攻めにあう光景がみられました。タイトルからは内容が窺えない大変分かりにくい宣伝文句であることや、歴史学からではない別の角度から文化財の性格を考える内容でしたが、参加者からは「大変興味深かった」との意見が多く見受けられ、企画展関連事業として一味違う形で開催した今回の企画が、当館によって今後も有効であることを示してくれた事業となりました。



国指定重要文化財「小林家住宅活用状況」

檜原村郷土資料館 清水正治

小林家住宅は、平成27年6月1日から一般公開となりました。

5月31日に現地にて落成式を行い、工事関係者をはじめ関係機関の方々にご出席いただき盛大に行われました。

式典終了後、東京都無形民俗文化財に指定されている藤倉獅子舞が上演され華をそえました。

小林家は、標高754メートルに位置することから現地までは徒歩またはモノレールでいくことになります。

モノレールを利用する場合は、予約が必要となりますので檜原村教育委員会にお問い合わせください。

平成27年12月までに実施したイベントを紹介します。

「古民家で山の暮らしを体験する旅」イベントを一泊二日でしかも小学生親子限定で10月と11月に各1回実施しました。

10月の内容は、食材の収穫から薪割り火起こし料理づくり等、自給自足の山の生活を体験しました。



11月は、山に自生する材料でつくる細工づくりと突き鉄砲づくりを体験しました。予定していた星空観察は、雨天により実施できませんでした。この他に10月に1回、11月に2回の日帰りイベントを実施し、参加者は延べ75名でした。

今回、実施したイベントの中で、特に、宿泊イベントは、山間地での山の生活を味わうことができ、参加した子供達には思い出に残る体験ができたのではないかと思います。

小林家住宅では、今後も色々なイベントを企画して、一人でも多くの人達が訪れてくれることを願っています。

知りたい・学びたいに応えること

日野市郷土資料館 白川未来

来館・電話・Eメールなどで当館へは様々な質問が寄せられます。年間80～90件ほどです。即答した場合などカウントしていないものも含めればさらに数は多くなります。回答に調査が必要な場合には、ある程度の時間が割かれます。そしてこちらのスケジュールに関わらず突然に質問はやってくるのです。そんな回答業務ですが、人々が資料館に何を求めているのかわかる上でも、“ふるさとネタ”を充実させるためにも、職員のスキルアップという点でも非常に重要な活動と言えます。

子供たちへの回答は説明方法を考えさせられます。歴史を学んでいない子供に、縄文、弥生…江戸、明治、大正、昭和時代をどのように説明したらよいのでしょうか。「今から何年前」とか、「おじいさんやおばあさんが子供の頃」など言葉を選ぶ必要があります。化石の絶対年代をちびっこ博士に問われた時には、論文を示しながら「この地層の火山灰を調べたらこんな数字になりました」と答えました。単純に回答をするだけでなく、考えてやりとりをしながら答えを示していくことで、少しでも心に刻んでもらえるのではないのでしょうか。

大人の場合は熱心な学習者からの質問が多いです。展示を

見た上でさらに詳しく知りたい方や、研究者、郷土史学習団体で学んでいる方などです。学ぶ意欲のある方からの質問の機会には、教わる事が多くあります。市内の石碑の場所を教えたら、早速石碑を訪ねて碑文内容についてご教示をいただきました。戦争遺跡について関連する新聞記事を示したら、関係者を探し出してきて貴重な証言を得る機会を得たこともあります。

対応に苦慮することもしばしばです。家族のルーツを調べたくても求める史料は見つかりにくいです。回答できる情報がなくお役にたてないこともあります。子供が自由研究の宿題のために来館し、課題を絞ることから話をすることもありました。また目的をはっきり示してもらえず、昔の地名や土地利用についての質問が舞い込んだ時には、不動産購入関連なのかと推測しつつ、地図など一般公開されている資料を紹介しました。

博物館の仕事というと「モノ」と向き合う仕事ですが、人と接する場面の多い仕事でもあります。質問や回答といったやりとりを通して「ふるさとを伝え、ふるさとを伝えてもらい」資料館の情報を蓄積していきたいと思えます。

展示テーマと来館者について—平成27年度展示から—

くにたち郷土文化館 佐山淳史

本年度は

- (1) 写真展『学舎のまちくにたち—谷保村のころ—』
- (2) 『彫刻家 今城國忠の世界』
- (3) ミニ展示『戦後70年 くにたちと戦争』
- (4) 秋季特別企画展『村の明治“医” 新一谷保の村医者本田家の軌跡—』
- (5) 『むかしのくらし展』

の5つの企画展を実施した。当館の場合、企画展は通常年に4回行うが、戦後70年ということで戦争を扱ったミニ展示を特別に行い、特に地元の方から反響をいただくことができた。

秋季特別企画展『村の明治“医” 新一谷保の村医者本田家の軌跡—』は、国立市甲州街道沿いに居を構える名主であり、かつ当地で医業をも担っていた「本田家」の活動を中心に、近代化が進められた時代の、医療をめぐる世の中の仕組みや、人々の病に対する意識が変わっていく様子などを取り上げた。

秋季企画展のテーマには、明治に入って行われた近代化／西洋化によって、世の中の仕組みが大きく変わり、人々の価値観も揺さぶられる様子が、価値観の衝突が激化する現在という時代に生きる我々にも大きな示唆を与えてくれる——などという、少々大仰な意図も含ませてはいたものの、実のところ集客に不安を抱えてのスタートだった。しかし、フタを開けてみれば、大勢の来館者を迎えることができた。それは、時代に沿ったテーマ設定の功績というよりも、国立市民の「本田家」に対する興

味、関心の深さによるところが大きいと考えられる。

博物館近くに住む住人の方からは、「今回の企画展開催中は、館の近くで市内に住む知り合いに会うことが多かった。いつもより地元の方が興味を持ってきているのではないか」という声を頂いた。地域博物館として、どのような展示テーマを設定するかということは、常に悩ましい問題であるが、地元の方が知ってみたいと思うことを理解することの大切さに改めて気づかされた展示であった。



秋季特別企画展『村の明治“医” 新一谷保の村医者本田家の軌跡—』展示風景

現在、多くの地域博物館にとって来館者数が一つの評価の基準になっている。その結果、当然来館者数の少ない事業や

展示に対しては、原因究明と対策を立てることが求められる。広報の方法や、企画自体の適切さといったものはそういった際によく原因としてあげられる部分であるが、具体的にどのような対策が立てられるかという、心もとない。予算も人員も増やすことは困難であるし、企画や展示に関わる部分になると、その対策はいよいよ精神論に近づいてくる。そのようななか、時間的、精神的に追いつめられていく学芸員もいるだろう。

結局のところ、現場では現状で対応できる最善（と思われること）を積み重ねていくことしかできないが、今回のミニ展示と秋季企画展は、企画が地域住民の要求に響けば、良い反応があるということが信じられる好事例であり、ある意味で当館にとって今後への希望とも言えるものであった。同時に、まだ可視化されていない地域住民の要求をいかに的確にキャッチするかが今後の課題と言えよう。



ミニ展示『戦後70年 くにとちと戦争』展示風景

地域の生涯学習の場「東村山学」から「市史を読む会」へ

東村山ふるさと歴史館 教育普及係 宮澤美和子

東村山ふるさと歴史館の開館10周年であった平成18年度より「東村山学」という講座が始まりました。当時の館長より、学芸員がどのような業務を行っているかを市民に紹介するとの発案で開始された講座です。ふるさと歴史館が、開館して10年さまざまな体験学習や講座が開かれてきましたが、「生涯学習の場として地域を学ぶ」をテーマにさまざまな内容の講座を実施してきました（内容は表参照）。この東村山学も今年度でいったん休息します。これは、東村山学に対応する講座が多く生まれ、通年で学ぶ機会が増え、重なる部分も多くなったためです。

特に「市史を読む会」は、平成25年夏から開始した『東村山市史』を教科書にして学ぶ講座です。開設当初は、10人程度の参加者を想定しての開始でしたが、第1回目から30人越えのペースで、毎回開催しています。現在では、中世・近世・近代の時代分けの講座を順番に毎月1回、事前申込みなしの講座が開かれます。特に参加者からは、市史を利用しているので、今学んでいる時代や社会環境がわかり、通常の単発講座より立ち位置がはっきりしている、との声も聞かれます。また、観光ボランティアの学習の場としても活用されています。

生涯学習のステージの中で、この「市史を読む会」の活動は、東村山周辺の歴史講座の初級者コースのようなものです。博物館を生涯学習の側面から見ると、「市史を読む会」のような初級者コース以外にも中級コース、上級コースも用意しなければならないのかもしれません。けれども裾野を広げるという意味では、「市史を読む会」の活動は、非常に手ごたえを感じる教育普及となっています。

東村山学の年度ごとのテーマと内容

年度	テーマ	日付	内容
1	あなたのまちの東村山学	10月22日	地域学1「ミュージアムを学ぼう」 民俗学1「民俗学概論」
		11月23日	地域学2「地域研究としての東村山」 民俗学2「村山地域の織物と村山餅」
		11月26日	歴史学1「古文書講座 繁盛記」 歴史学2「近代の東村山 - 幕末・戊申・西南戦争」
		12月10日	考古学1「考古学講座」 考古学2「縄文の漆」
		6月10日	下宅部遺跡における狩猟儀礼 戦時中の町長の日記
2	あなたのまちの東村山学	8月5日	遊びの民俗 東村山の年中行事【夏】
		8月26日	地域博物館におけるエコミュージアム
		10月14日	中世の道 鎌倉往還 近世の地藏信仰の特色
		11月18日	正福寺にまつわる昔話と伝説 正福寺の歴史
		10月4日	秋から冬への年中行事 トオカンヤの秋まつり
3	伝統文化講座「秋から冬にかけての民俗行事」 郷土歴史講座「狭山丘陵と武蔵野」	10月11日	年中行事の中の稲わらと麦わら 山口観音のお十夜
		11月22日	狭山丘陵事始 村山貯水池誕生
		11月29日	武蔵野、江戸からのまなざし 旅人からみる中世武蔵野
4	東村山を知ろう 東村山学のすすめ (中央公民館共催事業) 東村山の近代と駅	5月21日	八国山たいげんの里見学
		5月28日	森のひと、下宅部での暮らし
		6月4日	伝統的な生活と祈りの形
		6月11日	多摩湖誕生 - 観光と保全の中で
		10月10日	鉄道以前の交通と街道 川越鉄道と東村山停車場の碑 全生園入所者と東村山駅 東村山駅西口の町場のなりたち
5	あなたのまちの東村山学	10月16日	中世の東村山に暮らした人々とその支配
		10月30日	東村山市多摩湖町出土の瓦塔
6	あなたのまちの東村山学	10月29日	狭山丘陵からみた古代の東村山
		11月5日	狭山丘陵周辺の双盤念仏
		11月19日	町の記録が語る戦時中の東村山
7	あなたのまちの東村山学	10月20日	東村山の郵便事情 - 東村山郵便局開局100年
		10月27日	東村山の民俗・秋の年中行事
		11月17日	東村山の商業 / 狭山丘陵の動物たち4
8	あなたのまちの東村山学	10月12日	下宅部遺跡の漆工関連資料等から考える縄文時代の植物資源管理
		11月2日	東村山の古代 / 多磨全生園と東村山 - 農産物品評会を中心に
		11月16日	徳蔵寺展にまつわる民俗 - 徳蔵寺と諏訪神社
9	あなたのまちの東村山学	10月13日	史跡めぐり、実地からみる東村山学 - 鎌倉街道を中心とした文化財めぐり
		10月18日	地域を支えた化成小学校
		11月1日	東村山の板碑 - 市内所在の指定文化財を中心として
10	わがまちの東村山学	11月23日	下宅部遺跡からみた東村山の歴史
		2月27日	実地からみる東村山学 - 鎌倉街道を歩く2

博物館の子供向け講座について

東大和市立郷土博物館 野崎・渡辺

東大和市立郷土博物館では、今年度は子供向け講座に力を入れて実施したので紹介します。これまでの講座は、一般向けに実施することが多かったのですが、子供向けにも力を入れていきたいと企画しました。「キッズ講座」、「宇宙の学校」、「夏休み科学実験」について報告します。

【キッズ講座】

昨年度から実施している講座で、子供たちだけ、工作や観察をするという趣旨の講座です。今年は「水ロケットをとぼそう」と「プラネタリウム体験をしよう」を実施しました。どちらも初めて実施する内容でした。ゴールデンウィークに実施した「水ロケットをとぼそう」はペットボトルを集めたり、制作キットを作成したりと準備には手間取りましたが、自分が作ったマイクロケットがうまく飛ばせた子供たちには満足感がありました。夏休みに実施した「プラネタリウム体験をしよう」も普段見ているだけのプラネタリウムを自分で操作したり、自分の書いた絵がドームに映し出されるなど短い時間でしたが、やり終えたあとはおもしろかった。もっとやりたいとの感想が聞かれました。来年度は何をしようかあれこれ考えているところです。



【宇宙の学校】

親子講座として、今年度からスタートしました。キッズ講座は子供たちだけなのに対して、宇宙の学校は保護者と子供が対話をしながら工作をし、みずかな科学に親しむということを目的としています。保護者が一緒ということで低学年から参加しています。「あれ?!」「できた?」と親子でわいわいやる姿はほほえましい限りです。またやろうと盛り上がっています。今年は「フィルムロケットをとぼそう」「熱気球をとぼそう」の工作やプラネタリウムでのお話などを実施しました。この講座、講師側はちょっと手助けをするだけで、あとは家族で相談しながら進めています。工作材料も家庭で準備できるもので基本的に行っているため、帰宅した後にもやっている方がいるかもしれません。理科好きが増えると期待しています。来年度から

本格実施をめざして準備をしています。



【夏休み科学実験】

こちらも今年度からの実施で、夏休みの小学生の自由研究に役立つことをイメージした科学実験講座を開催しました。独立した講座として2回、「割れにくいシャボン玉を作ろう」「通り抜ける壁～偏光板で遊ぼう～」と題し、それぞれ20人程度の募集としました。科学を楽しみながら学ぶということを目標に、前半の講義で原理を学び、それをもとに後半では工作・実験を行います。何度も内容を練り直しながらの開催でしたが、おかげさまで多くの申込みをいただきました。講座の中で、参加した小学生や保護者が熱心にメモを取りながら話を聞いている様子が見られ、大変嬉しく感じました。

これらの講座は普段から博物館の活動にご協力をいただいているボランティアの方々の協力を得ながら実施しています。講座や企画展示等において、ボランティアやさまざまな分野で活動されている市民の方々の力は不可欠であり、双方が学びあい刺激を受けながら進めていくことが重要だと感じています。来年度以降も実施時期、内容等を考慮しながら、実施していきたいと考えております。



特別展「多摩の谷戸と農のいとなみ」について

パルテノン多摩歴史ミュージアム 仙仁 径

ここ数年、当館では多摩丘陵の谷戸と呼ばれる浅い谷地形をテーマにした展示を行っており（2013年度企画展「谷戸のおはなし」、2014年度企画展「谷戸のわき水とふしぎな生き物」）、2016年3月12日から始まった特別展では、多摩丘陵の谷戸で営まれてきた農業を取り上げています。展示に先立ち実施した多摩市内の農家への聞き取り調査から見てきた当地の農業の特徴について、その一部をご紹介します。

多摩市域は、多摩ニュータウン開発が始まる昭和40年代前半まで、ほとんどが農村でした。当時の農家の多くは専業農家なのだと思っていましたが、ほとんどは自家消費分の作物を作る自給的な兼業農家でした。これは、起伏のある谷戸地形のために広い農地が確保できないことや、水が冷たく日照時間の短い「谷戸田」の生産性の低さなどが原因として考えられます。

また、農業を支える存在として、多摩地域の種苗屋が重要な役割を担っていたことがわかりました。当地の農家が野菜の種苗を府中市のムサシヤ種苗店か、八王子市の小林種苗店などで購入していました。小林種苗店の方によると、先代の方が八王子市内や神奈川県津久井郡（現相模原市）、多摩市方面を回り、農家から注文をとっていたそうです。さらに農家では売った品種の出来なども聞き、より地域に合った品種を把握するよう心がけていたようです。

筆者は植物学が専門のため、あきる野市ののらぼう菜や東久留米市の柳久保小麦のような在来品種に関心があります。多摩市域では上記のように種苗を購入している家が多かったため、在来品種は残っていないだろうと考えていました。とこ

ろが取材している農家で昔から自家採種して栽培している葉菜（写真）があることを教えていただきました。その家ではコマツナと呼んでいますが、明らかに市販のコマツナとは異なるため、在来品種の可能性がります。

以上、本稿では展示内容の一部をご紹介しましたが、特別展ではこれらの他にも様々な内容を展示しています。7月11日まで開催しておりますので、ご覧いただければ幸いです。

最後に、本号の特集である戦後70年展に関連する話題として、2015年に刊行した『パルテノン多摩資料叢書第6集 多摩火工廠勤労働員日記—昭和19年～21年—』をご紹介します。本書は稲城市にあった多摩火工廠に勤労働員された立川高等女学校の女学生の日記を翻刻したもので、戦時中の訓話や、日常生活、空襲、多摩火工廠での作業のようすが、本人によるイラストとともに記されています。終戦をまたいで書かれており、価値観が大きく変化した当時の日本を、多摩の一少女の視点から知ることができる貴重な資料です。価格は700円（本体価格）で、歴史ミュージアムと通信販売で購入可能です。



在来品種の可能性のある葉菜

平成27年度開催した展覧会

江戸東京たてもの園 早川典子

■「下布田遺跡 一武蔵野の歴史と考古学—」

会期：平成27年3月28日～5月17日

江戸東京たてもの園が武蔵野郷土館から引き継いだ考古資料のうち調布市下布田遺跡の出土資料に焦点をあて、同館が1968年（昭和43）と1971年（昭和46）に行った発掘調査の様子やその成果も明らかにしました。

あわせて、武蔵野郷土館の歴史についても紹介しました。

■「モダン都市の文学誌 ～描かれた浅草・銀座・新宿・武蔵野～」

会期：平成27年6月2日～7月20日

東京の様々な地域を文学作品から読み解く展覧会。川端康成、永井荷風、龍膽寺雄、横光利一を通して、今につながる都市と郊外の姿を見つめ直すきっかけを感じていただければと考え企画しました。

■「東京郷土資料陳列館ものがたり 一東京の地域博物館事始め—」

会期：平成27年7月28日～平成28年2月21日

1934年（昭和9）、東京市は「有栖川宮記念公園」を築造しました。

公園地の東部に、東京の自然と人文の両面から市政の概要を展示公開する施設として、「東京郷土資料陳列館」が設置され、同年11月に開館しました。東京市内の小学生や公園利用者が訪れました。

終戦とともに荒廃しましたが、残った資料は戦後、武蔵野博物館、武蔵野郷土館、江戸東京たてもの園へと引き継がれました。

「陳列館」は東京市が手がけた地域博物館第一号であり、いわば、江戸東京博物館のルーツです。本展では、「陳列館」の展示構成に基づき当時の展示を可能な限りよみがえらせることにより、東京の地域博物館の歴史を振り返りました。

子ども対象の展覧会を開催して

たましん歴史・美術館 杉本 藍

たましん歴史・美術館では、2015年6月30日から8月30日までの会期で、初の試みとして、子どもを主な対象とした企画展「お気に入りやさがして」を開催しました。

この展覧会は、多摩地域に根ざして活動をしている作家の作品を多摩地域の子もたちにも観てもらいたいと企画し、作品や作者に、より興味を抱いてもらえるように内容を工夫した参加型の展示としました。具体的には各作品に小学生・中学生用の2種類の問いを設け、ワークシートも同様に2種類を用意しました。



展示構成は「気になる」をキーワードに、同一作家による同タイトルの絵画と彫刻を見比べて、どちらかを鑑賞者が「選ぶ」、問いをヒントに作品を観て気になるところを「さがす」、作品の気になるところをさがしてお気に入りや「みつける」という3段階の作品鑑賞を主体的に行なえるようにしました。

また、関連イベントとして小学生・中学生対象のギャラリートークを会期中に各1回行い、大人も含め21名の参加がありました。小学生対象のギャラリートークで、鈴木欣二「仔猿」についてタイトルをふせて鑑賞したときのことです。「この3匹の猿は親子? 兄弟? 友だち? それ以外?」と問いかけたところ、ひとりが「同じくらいの大きさだから親子ではないと思う」もうひとりが「兄弟か、友だちかな?」さらに他の参加者が「みんな変な方向を向いていて仲良くなさそうだから、兄弟でも友だちでもないような」そして、兄弟か友だちかと悩んでいた参加者が「ケンカしているのだと思う」という一連のやりとりがあり

ました。ひとつの作品を他者とともに掘り下げると作品の見方が広がる好例を、企画した私自身も体験することができました。

広報では、当館のある国立市内の公立の小中学校へチラシを家庭数配布したところ、前年の同時期の3倍、全児童・生徒数の約3%、143名の入館者数へとつながりました。また、ポスターやチラシといった印刷物で告知をしていない近隣の市町村(立川市、昭島市、小平市、小金井市、東村山市、日野市、八王子市、府中市、武蔵村山市、稲城市等)からの児童・生徒の入館者も一定数みられました。ウェブサイトのみで調べてきたという子どもたちの反応があり、広報のあり方として少しヒントを得たように思いました。ウェブサイトの充実がどこまで入館者数増加につながるかは把握できませんが、子どもたちにとってもアクセスしやすい魅力的なサイトづくりを心がけていきたいと思います。

当館ではより多くの子どもたちに本物の作品を観る機会をつくりたいと取り組み始めています。子ども対象の展覧会開催がひとつのきっかけとなり、より多くの多摩地域のみなさまに当美術館の活動を知っていただければと思います。

そして将来、子どもたちが大人になったときに地域の美術館に親しみ、美術を愉しむことにつながるよう、今後も継続して地道に子ども対象の展示・企画を行っていきたいと考えます。



平成27年度の企画展示について

東京都埋蔵文化財センター 小西絵美

当センターでは、平成27年度企画展示として『先祖と生きる暮らしとお墓のうつりかわり』を平成27年3月14日～平成28年3月6日まで開催しました。今回の展示では、遺跡に残された「埋葬」という行為を通じて、その時代における「死」のとらえ方や受け止め方をみていくことをテーマにしました。対象とする時代は縄文時代から江戸時代の各時代で、多摩ニュータウン地域の遺跡を中心に取り上げました。

今回の展示における特徴として、展示を案内するキャラクターの登場、ジオラマの多用の2点が挙げられます。展示を見学する上で案内役を担ったのは、平田篤胤著『勝五郎再生記聞』に登場する勝五郎という少年です。中野村の農村に暮らす彼は、8歳の時、自分の前世は程久保村に住む藤蔵という少年で6歳の時に疱瘡で亡くなったことを語ります。この勝五郎の生まれ変わり談が平田篤胤の耳に入り、『勝五郎再生記聞』として記録されました。このようなエピソードを持つ勝五郎は「亡くなった者」と「残された者」の両者を知るという意味で適任だと考え、展示の案内人に登場させたのです。

特徴の2点目はジオラマを多用した点です。企画展示スペースの中央にはあきる野市の瀬戸岡古墳群30号墳の石室模型を、縄文、弥生、室町、江戸の各時代の展示ケースには遺跡の景観を復元したジオラマを設置しました。後者の4つのジオラマにはそれぞれモデルになった遺跡があり、竪穴住居や掘立柱建物、方形周溝墓などの遺構とそれらが立地する地形も再現しました。

ところで、展示の案内人を務めた勝五郎は、日野市と非常に縁の深い人物です。この企画展示にちなみ、当センターでは日野市郷土資料館との共催事業として、勝五郎縁の場所を訪ねるウォーキングイベント『勝五郎生誕200年記念ウォーク～多摩のお墓と勝五郎生まれ変わり物語』を開催しました。



平成27年度企画展示のチラシ

平成27年度活動報告

集合住宅歴史館 溝口 忠

集合住宅歴史館を所管するUR都市機構の「技術研究所」は平成27年4月1日から「技術管理分室」に改名しました。集合住宅歴史館は戦前と戦後（昭和30年代）に建設された集合住宅の歴史を実物大で“見て・聞いて・学ぶ”ことができる施設であり、関東大震災復興のために設立された同潤会が建設した「同潤会代官山アパート」や戦後の住宅不足解消のために設立された日本住宅公団が建設した「蓮根団地2DK」「晴海高層アパート」「多摩平団地テラスハウス」や「住宅設備の変遷」などをご覧ください。また同じ敷地にある他の研究施設とあわせてご覧いただくと集合住宅のことをより深くご理解いただけます。施設の見学は、月曜日から金曜日の午後に事前予約制で行っており、各組に説明員が付き6施設を公開しております。

■企画展示“ミニ集合住宅歴史館展”の開催

平成27年10月28日にUR都市機構が毎年行っている「UR技術・研究報告会」（日経ホール：東京都千代田区）の会場に企画展示として“ミニ集合住宅歴史館展—昭和30年新しい住まいの形と暮らしが始まった—”と題して当日会場に足を運んでいただいた約600名の方々に集合住宅歴史館の一部をご覧くださいました。会場には昭和30年代に使用されていたステンレ

ス流し台やダイニングテーブル、木製の風呂桶（浴槽）など、懐かしい展示物を八王子から持ち出しました。

ステンレス流し台は日本住宅公団が日本で初めて量産化したモデルで、それ以前は人研ぎの流し台が主流でした。ダイニングテーブルは、当時の日本には市販品がほとんど無かったために造り付けの家具として供給されたものです。



撮影：山本治道

■集合住宅歴史館の来場者について

集合住宅歴史館を見学した方の業種は平成27年度11月末時点では学校関係者が一番多く53.1%（前年58.2%）、次いで官公庁等12.4%（前年20.8%）、不動産・建設関係11.4%（前年10.2%）の順となっており、その他は23.1%（前年10.9%）となっております。来場者の満足度は“高い”と“やや高い”を合わせると約96%（前年約95%）の高い満足度を維持しております。

科学の礎の地、田無

多摩六都科学館 春口芽生

2人の日本人がノーベル賞受賞で沸いた2015年。10月5日に生理学・医学賞に大村智博士が、6日には物理学賞に梶田隆章博士が受賞し、日本の先端科学が世界に注目されました。その効果もあってか、多摩六都科学館では受賞直後より関連展示をめぐって取材記者や来館者が多く訪れ、10月11日には過去最高の来館者数を記録。世間同様に館内もたいへん賑わいました。

梶田博士が所長を務める東京大学宇宙線研究所と多摩六都科学館は、受賞前の2015年5月に相互協力協定を締結しました。その時の記念講演「宇宙線で探る世界～科学の芽を育んだ田無～」に梶田博士が登壇し、高エネルギー加速器研究機構（KEK）の山内正則機構長と当館の高柳雄一館長を交え、宇宙線研とKEKが共同で進めている「TK2実験」や当時の田無キャンパスでの研究、研究費予算の中で成果を出すことの苦労などを穏やかに語られました。会場となったプラネタリウムドームは約150人の参加者で埋まり、目を輝かせた中高生の姿も目立ちました。



宇宙線研究所との 記念講演の様子

連携は、同研究所が約15年前まで当館と同じ西東京市（当時の田無市）にあった縁から始まりました。当館への展示物の寄贈や企画展への協力など、当時から深い親交があり、現在も定期的に第一線で活躍する研究者を招き講演会を開催しています。

宇宙線研究所以外にも以前の西東京市にはKEKの前身である東京大学原子核研究所など日本を代表する研究機関が集結していました。全国から研究者が寄り集い、ここから優れた研究成果が世界に発信されました。梶田博士、小林誠博士、益川敏英博士など歴代のノーベル賞受賞者が若かりし頃に研究に励んだ場所であり、日本の科学の発展の、礎の地ともいえるのです。

受賞後、梶田博士は「若い人には宇宙の謎解きにぜひ参加してほしい」と呼びかけました。当館としては、先端科学と市民の方々が交わる場を広く創造していくことで、未来のノーベル賞受賞者がこの地域から誕生することを願っています。



協力協定締結の調印式

2015年度秋季企画展開催報告 私立療養所・待労院の歩みをたどる

国立ハンセン病資料館 西浦直子

2015年度の秋季企画展では、「私立ハンセン病療養所 待労院の歩み 一創立から閉院までの115年」と題し、熊本市内で1898年から2013年まで運営されたカトリック系の私立療養所をとりあげました。待労院資料館など関係機関のご協力を得て、当館で紹介することの少なかった待労院の足跡を、約130点の資料を通してご覧いただきました。

展示は待労院の創立から閉院までを3期に区分し、展示室の壁面に沿って構成しました。そこでは信仰に基づく生活と、カトリック系の私立療養所が直面した諸問題、規模の縮小に際しての動きなどを中心に展示しました。



会場風景。展示室の壁面に沿って待労院の歩みに関する資料を配置し、室中央に「聖母ヶ丘」に関するコーナーを設けた。

また創立以来、修道院や老人福祉施設、児童養護施設などと「聖母ヶ丘」と呼ばれる場に共存し続けた点も待労院の大きな特徴です。そこで、室内中央に同院を含む「聖母ヶ丘」の変貌と現在について展示するコーナーを設けました。

会期中は教会などから情報を得た来館者も多く、カトリックの私立療養所という点に惹かれて来館し、初めてハンセン病にまつわる歴史に触れたという声もありました。

現地には待労院資料館をはじめその足跡にまつわる史跡が多く残されています。本展をきっかけに足を運んでいただければと考えています。



ギャラリートークの様子（会期中月1回開催、写真は12月13日）

最近の活動報告 JAXAとの教育連携

コニカミノルタサイエンスドーム（八王子市こども科学館） 森 融

八王子市教育委員会は平成27年3月に宇宙航空研究開発機構（JAXA）と「宇宙航空教育活動に関する協定」を締結しました。これは、宇宙に関する学習を通じて心豊かな青少年の育成と指導者の啓発を目的としています。

当館ではJAXA宇宙教育センターと認定NPO法人子ども・宇宙・未来の会の協力を受けて、平成20年度からコズミックカレッジを、23年度から八王子宇宙の学校を開催しています。

コズミックカレッジには小学校1、2年生コースと3年生以上のコースがあり、1、2年生は飛ぶものを作ったり、星砂で絵を描く工作、3年生以上は真空や空気の実験などで宇宙環境を学びます。

宇宙の学校は小学校1～3年生が親子で、宇宙教育センター開発のプログラムに取り組む4回連続講座で、市民団体との協働事業として開催しています。今年度は3会場、204組の親子が参加しました。「子どもと一緒にワクワクする体験ができた。」「レポート発表をして、自信につながった。」などの感想をいただいています。

今回の協定はこれらを前進させるための取り組みで、夏休みには学校教育の担当になりますが、新たに教員の指導力パワーアップ研修、小学校理科指導力養成研修をJAXAで開催し、参加者にも好評でした。今後も引き続き、これらの事業を充実させていく計画をしています。



コズミックカレッジ 真空実験



八王子宇宙の学校 熱気球を作ろう

平成27年度事業から

八王子市郷土資料館 尾崎光二

当館では、常設展示のほか特別展（2回/年間）やコーナー展（4回/年間）、体験学習・講座（1回/月）を開催しています。今回は、コーナー展、体験学習について紹介します。

コーナー展では、八王子七福神めぐりにあわせて開催した「七福神 八王子の恵比寿・大黒 - めでたいもの大集合」（12月22日～1月17日）では、市内の旧家に伝わる「大黒」「恵比寿」の彫刻や掛け軸など七福神に関係するもののほか、「めでたいもの大集合」と題して、かつて市内高月地区で作られていた「だるま抱きねこ」や「めでたい絵柄が描かれた器」のほか、市内の商店などを紹介する「双六（大正から昭和初期の資料）」を展示しました。



コーナー：展七福神 八王子の恵比寿・大黒めでたいもの大集合

体験学習では、「八王子かるたと正月あそび」（1月11日）では、収蔵資料を利用した「双六（コーナー展展示資料）」、「コマ回し」や「羽根つき」、八王子城跡マスコットキャラクターうじてるくんの「福笑い」、「ゴム飛び」、「折り紙」、屋外通路での「お絵かき」など多彩な昔遊びなどを体験していただきました。

今回の講座では、初めて郷土資料館に来たという未就学児と家族での参加が多く、明るい雰囲気イベントとなりました。参加者からは、「子どもたちが昔遊びを楽しめて良かった、また来年も来ます」との感想があり、郷土資料館に足を運ぶ良いきっかけとすることが出来ました。



体験学習：八王子かるたと正月あそび

「国立天文台ミュージアム国際シンポジウム」 開催報告

国立天文台 天文機器資料館 根本しおみ・臼田-佐藤 功美子

国立天文台では、2010年から「国立天文台博物館構想」の検討を開始しました。2013年にはミュージアム検討室が新設され、国立天文台が所有する貴重な資料のアーカイブに加え、最新の天文学を発信する「（仮称）国立天文台ミュージアム基本構想」を2014年度にまとめました。

検討を開始してから6年目の今年、これまでの集大成として、9月26日から28日の3日間、世界各国の天文学研究機関で行われているミュージアム活動の担当者を招いて、「国立天文台ミュージアム国際シンポジウム」を開催しました。シンポジウムの主なトピックは、各国の天文台ミュージアムの活動紹介、天文台ミュージアムにおけるサイエンス・コミュニケーション、マネージメント、今後の相互協力の可能性や天文台ミュージア

ムにおける映像コンテンツの利用、などでした。9カ国から94人が参加し、25件の口頭発表と12件のポスター発表が行われました。また、海外を含む6ヶ所から7人がテレビ会議システムを利用して参加しました。

シンポジウムの最終日には、分科会での議論が行われ、「（仮）国立天文台ミュージアム」への提案がなされました。最後の全体会では、日本の天文学・宇宙科学の主要機関における天体画像・映像をより多くの方が使いやすいするための、著作権ルール等に関する提案が「三鷹宣言」にまとめられ、賛同者が署名しました。

また、国立天文台のアーカイブ資料を一般の方にもご紹介するため、総合資料台帳の作成に着手しました。この件について、前述のシンポジウムで紹介いたしました。今年度末にWeb上で公開する予定です。



「学芸員養成課程展示室」平成27年度の活動

首都大学東京 91年館(学芸員養成課程展示室・実習室) 小林加奈・村田昌則

当館は首都大学東京における学芸員養成教育のために使用する一方で学外の皆様にも公開しており、大学の授業期間中には常設展をご覧いただけるほか、企画展も実施しています。ここでは本年度実施した企画展についてご紹介します。

企画展「東京の海・山・島に―首都大学東京のフィールド研究と学外体験型プログラム―」(10月23日～11月8日)

東京都は、大都市圏とともに、亜熱帯の島嶼部から奥多摩等の山間部にも広がり、自然環境、社会経済的条件、そして歴史・文化・民俗まで、多様な地域から成り立っています。そして東京都の公立大学である首都大学東京では、この全域を重要な研究・教育の場としています。

この企画展では「自然と社会と文化」に注目して、東京の海・山・島をフィールドとして展開する本学の研究内容と最新の成果を展示しました。またこれらの研究成果を活用して学部学生、留学生、社会人などを対象に実施している学外体験型の教育プログラムについても紹介しました。

当館は平成24年に展示室として使用を開始し、企画展はこの展示が通算7回目でしたが、3学部6コース11名の教員が内

容を担当し、これまでで最も広い連携体制のもとに実施されました。展示資料も水野家文書「伊豆七島絵図」(本学図書館蔵)といった歴史資料から、植物・昆虫等の自然史標本まで幅広く、多くの方に興味を持っていただけたようでした。

また展示期間中には展示担当者(教員・研究者)によるギャラリートークを実施しました。展示内容には盛り込めなかった調査のエピソードをご紹介できたり、来場の皆さんからのご質問にその場で答えできるなど、楽しく、意義深いひと時となりました。

このような企画展のほか、大学説明会(夏季・入学希望者向け)や、大学祭(11月)といった行事にあわせた臨時的開室も実施し、毎回好評です。今後も学内外のつながりを大切にして取り組みを継続していきたいと考えています。



企画展会場の様子(ギャラリートーク)

むいから民家園の新たな1年目

狛江市立古民家園 新垣夢乃

狛江市立古民家園(むいから民家園)は、平成14年に開園してから10年以上が経過し、管理・運営方法と事業内容を見直すことになりました。管理・運営方法の見直しの主眼は、市の直営とすることで、園内にある市指定文化財の旧荒井家住宅主屋と旧高木家長屋門の整備・補修を計画的に行い、良好に保護・保存し、次世代に引き継いでいくことにあります。事業内容については、昔の暮らしや伝統文化を学ぶことができる体験学習など、民家園にふさわしい内容の事業に力を入れ、地域文化の継承と発展に寄与するという本来の設置目的に立ち返ることにあります。そのため、本年度は、ボランティアとして尽力していただいた方々の協力を得つつ、これまで行ってきた体験学習や年中行事の展示などを引き継ぎながら、様々な面において試行錯誤の繰り返しだったといえます。一方で、例えば、狛江市の友好都市である山梨県小菅村からそばの実をいただき、園内の畑に作付けを行うなど、新たな事業にも取り組んでいきました。

そばの作付けは、8月に来園していた子どもたちと一緒に種播きを行い、11月に収穫して、脱穀と実の選別を行いました。民家園でのそばの作付けは、初めての試みでしたが、播いた種とはほぼ同じ量の実を収穫することができました。次年度は、そばの作付けをはじめとして、試行錯誤して行っ



子どもたちと種播き

てきたことをどのように事業に活かすかが課題となります。

事業内容の試行錯誤とともに、本年度は、小学3年生が総合学習のなかで学ぶ「くらしのうつり変わり」の単



畑にそばの花が咲く

元を古民家園で受け入れるにあたり、その見直しを試みました。昨年度までは、1校(3クラス)を1日で受け入れる体制で体験学習を実施してきました。それを本年度からは、1クラスを1日で受け入れる体制に変更しました。古民家園のスタッフは多いとはいえ、1クラス1日での受け入れは負担の増加となりますが、受け入れる回数を増やすことで、1人ひとりの子どもたちと会話ができるような受入れ体制を目指そうと考えました。それによって、子どもたちが考えながら昔の道具を使い、昔の暮らしを体験することができたのではないかと考えています。また、子どもたちの疑問や関心に答える時間を確保するように努めました。実際には、子どもたちの自由な発想から生まれる質問に、受入れ側のスタッフがあたふたすることも多々あり、スタッフの勉強になっているともいえます。

総合学習の「くらしのうつり変わり」における体験学習は、子どもたちと古民家園をつなぐきっかけづくりでもあります。今後も、試行錯誤を繰り返しつつ、その内容を充実させていきたいと考えています。

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩 No.37

発行日 2016年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会
2015年度会長 多摩六都科学館
西東京市芝久保町5-10-64 042-469-6100

編集委員 国立ハンセン病資料館：黒尾和久
東村山ふるさと歴史館：松崎睦彦
八王子市こども科学館：森 融
府中市郷土の森博物館：本間隆幸

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩8分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス「市民会館」下車
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車すぐ
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤の台団地行きバス「市立博物館前」下車徒歩7分
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩15分
調布市郷土資料館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館 けやき館	西多摩郡瑞穂町大字駒形富士山316-5	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920-1	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩20分/コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から新道福島行きまたは富士見町操車場行きバス「団地西」下車徒歩5分/JR青梅線「西立川駅」下車徒歩15分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行か藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環③「小金井公園入口」下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス(イオンモール行き)または都営バス(青梅車庫行き、箱根ヶ崎行き)で「八幡神社」下車徒歩2分/多摩モノレール「上北台駅」からちよこバス外回り「郷土博物館入口」下車徒歩2分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩9分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西武バス「小金井公園西口」か関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車徒歩20分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5～7分
集合住宅歴史館(独立行政法人都市再生機構)	八王子市石川町2683-3	042-644-3751	JR八高線「北八王子駅」下車徒歩10分、JR線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」、「田無駅」北口からはなバス第4北ルート「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車
コニカミノルタサイエンスドーム(八王子市子ども科学館)	八王子市大横町9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「戸吹」・「みつい台」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩2分
国立天文台天文機器資料館	三鷹市大沢2-221-1	0422-34-3962	JR中央線「武蔵境駅」から小田急バス「狛江駅」行き「天文台前」下車/京王線「調布駅」から小田急バス「武蔵境駅」南口行き「天文台前」下車
首都大学東京91年館	八王子市南大沢1-1	042-677-1111	京王線相模原線「南大沢駅」下車徒歩5分
狛江市立古民家園(むいから民家園)	狛江市元和泉2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」より徒歩10分/小田急線「狛江駅」北口より「多摩川住宅」行バスで「児童公園」下車